

日本語とジェンダー

vol.XIV2014



日本語とジェンダー 第14号 目次

【第14回年次大会 基調講演要旨】

ジェンダーの文法；文法のジェンダー：The Grammar of Gender; the Gender of Grammar ポール・スノードン（杏林大学）	1
---	---

【第13回年次大会 シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

日本語の英訳に見る照応詞の扱い：星新一『ノックの音が』から 矢野安剛（早稲田大学 名誉教授）	2
---	---

『キャッチャー/ギャツビー/ティファニー』の「僕/私/あたし」：村上春樹の翻訳とジェンダー 斎藤理香（ウェスタン ミシガン大学）

村上春樹の翻訳と「翻訳文体」	4
ジェンダー表現と小説の文体	4

【第14回年次大会 研究発表 要旨】

女ことばと翻訳：理想の女らしさへの文化内翻訳 古川弘子（東北学院大学）	5
--	---

中国語のオネエ言葉をめぐる現象と特質

河崎みゆき（上海交通大学）

1. 「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」の定義	7
2. 研究内容と方法	7
3. オネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」の特徴	7
4. オネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」をめぐる史的な角度	8
5. まとめ	8

小説タイトルの翻訳とジェンダー：『ボヴァリー夫人』について

三原智子（群馬大学）

日本語 OPI から考える日本語教育とジェンダー

銭坪玲子（長崎ウエスレヤン大学）

1. 目的	10
2. 日本語教育と日本語 OPI	10
3. 日本語 OPI とジェンダー的問題	10
4. ジェンダーをめぐる歴史社会的視点及び社会理論	10
5. 今後の課題	11

裁判例に見られるジェンダー・バイアス：「母親」「母性」「父親」「父性」の比較

加藤直子（お茶ノ水女子大学）

【研究例会 IN ハンガリー 発表】

日本語教科書に盛り込むジェンダー意識：教科書作成の経験から
佐々木瑞枝（武蔵野大学）

1. 日本語・日本文化関連の教科書（出版年代順）	15
1.1 『日本事情』	16
1.2 『日本社会再考』	17
2. 日本語の問題集にもジェンダー意識を盛り込めるか	18
3. まとめ	21

Gender in Japanese Language Textbooks: Modern Society and Teachers' Awareness
Terumi Mizumoto (北九州市立大学)

1. Introduction	22
2. Previous Studies: Comparative Analyses of Japanese Language Textbooks and Natural Speech	22
3. Surveying Japanese Language Instructors' Awareness and Analyzing the Data	23
4. Thoughts and Conclusions	24

(日本語訳)

日本語教科書におけるジェンダー：現代社会の実情と教える側の認識

1. はじめに	26
2. 先行研究：日本語教科書と自然会話の比較分析	27
3. 日本語教育者への意識調査と結果分析	27
4. 考察とまとめ	28

教科書作成におけるジェンダーバイアス **The Gender Issue in Textbook Design**

Noriko Sato (ブタペスト商科大学)

Anna Székács (ブタペスト商科大学)32

Gender Consciousness in Natsume Sōseki

Kayoko Takagi (マドリッドアウトノマ大学)

Sōseki as an enlightened writer	37
Early image of the woman and the general status of women in the Meiji era	38
Female roles in 三四郎 <i>Sanshirō</i> , それから <i>And Then</i> , and 門 <i>The Gate</i>	39
こころ <i>Kokoro</i> , 行人 <i>The Wayfarer</i> and 道草 <i>Grass on the Wayside</i>	39
虞美人草 <i>The Poppy</i> and 明暗 <i>Light and Darkness</i>	41

Kinship Terminology from a Cultural Perspective: Japanese versus? Hungarian

Judit Hidasi (ブタペスト商科大学)

What is kinship?	43
Descent patterns categorizations	44
Kinship terms and kinship terminology	45

日本語ジェンダー学会第 15 回大会のお知らせ.....49

日本語ジェンダー学会会則.....50

日本語ジェンダー学会役員名	51
日本語ジェンダー学会入会申込書	53
Regulations of the Society for Gender Studies in Japanese	54
Officers of the Society for Gender Studies in Japanese	56
Application for Membership	58
執筆要領	59
編集後記	62

ジェンダーの文法；文法のジェンダー
The Grammar of Gender; the Gender of Grammar

ポール・スノードン

日本語、英語、その他のヨーロッパ言語の例を挙げながら「ジェンダー」という概念を文法、生物、差別それぞれの面から考察した。問題点や矛盾に注意を向けながら、以下の 6 点を中心にパワーポイントで要点を述べた。用語は主に日本語になったが、英語やほかの言語の例も多数、示すこととした。

- ① ラテン語および現代のヨーロッパの言語での「ジェンダー」
 - a. その必要性 (意味の違い、等)
 - b. その表示方法 (語尾、冠詞や形容詞の形、等)
 - c. その(生物的性別と関係ない)ランダム性 (言語によつての違い、セットの中の不統一、等)

- ② Marked forms 有標形 / (英語の -ess、等) /
Unmarked forms 無標形 (英語の -er、等) /
Generic forms (英語の person、等)

- ③ Social Expectations and Adaptations 社会的理想、対応
Doctor, Nurse, Bicycle, Fish
(Doctor と Nurse の絵を描くとき、どちらの性にするか)
(自転車のデザインにおける生物的違いと社会による期待の違い)
“A woman needs a man like a fish needs a bicycle.” Irina Dunn, 1970
London SE1 9DT (WWI, 女性の“郵便屋”のための郵便番号)

- ④ From *hlaefdige* / *hlafeard* to *lollipop lady*, *lady friend*, *lady of the night*: asymmetry 不均等;
semantic derogation 意味上の軽蔑

- ⑤ Political Correctness 政治的公正 vs. Social Practice 社会的実際

- ⑥ Dear _____? 拝啓?、愛していますか? どの様な相手を期待していますか?
(Sir で十分なのか、むしろ Sir or Madam がいいのか)
Name, DoB, _____? 今日はどんな気分ですか? (性別: Sex か Gender か)

(Paul Snowden · 杏林大学 副学長)

日本語の英訳に見る照応詞の扱い：
星新一『ノックの音が』から

矢野安剛

異言語間翻訳でも、知識や眠りの程度を「深い、浅い/deep, shallow」と表現するように、たいていの場合は概念化 (conceptualization) が共有されていて直訳でよい。しかし、「内弁慶」は bossy at home and timid outside と説明しなければならないし、「油を売る」は waste time と置き換えなければならない。また、桜美林大学町田キャンパスへ来るのに、京王線が重要な場合でなければ come by the Keio Line train は by train と省略していい。逆に、「畳」は *tatami mat* のように情報を補わなければならない。このように、翻訳には説明、置き換え、省略、付加などの操作が加えられる。

コミュニケーションでは、発信者(話し手・書き手)は、言語内、言語外コンテキストから受信者(聞き手・読み手)がメッセージの内容を復元できると仮定した場合、その情報を省略したり、より形式が簡潔で情報量も軽い代用形に置き換える (Yano 1977, 1984)。たとえば、日本語では無標 (unmarked)、すなわち、非強調文の場合、「行きます」のように動作主には「ゼロ形式」を用いる。有標 (marked)、すなわち、強調・対照・指示関係の明確化 (disambiguation) の場合には「私が／は行きます」のように人称詞、コソアド系、述部代用形ダ・デスなどの「代用形」照応詞を用いる。英語では非強調文でも文法上 I, you, he, she, it, they; do; such, so などの代用形照応詞を用いる。いずれの場合も、完全形よりも形態が簡潔で、情報量が少ない。「コミュニケーションにおける経済の原則」に基づいた語法である。ちなみに、「ゼロ形式」とは文法の枠内で Kuroda (1965)が提唱した zero-pronominalization を、談話文法の枠組みで Yano (1977)が発展させた「ゼロ照応詞」という概念である。ワインを一口飲んで「ちょっと若いね」と言うように、先行概念が談話の場に顕在している「状況的」なもの、就職面接から戻ってきた息子に母親が言う「どうだった?」のように談話の場には存在しないが聞き手の理解を前提にできる「仮定的」なもの、および「今、ここ、あなた・私」のように談話の時・場・参加者が先行概念の役割を担う「言語運用的」なものがある。

あまり、文学的技巧を駆使しない星新一のショートショート『ノックの音が』で、日本語の英訳の場合にどのようなストラテジーが用いられているかを見てみると、消えた性差性を he/she, his/her, him/her などのト書きで補っている。「有標」から「無標」への流れが普遍的な傾向だという見方に立てば、日本語のゼロ形式は英語の代用形式より情報の余剰性が少ない。たとえば、"John put his hands in his pockets."は「ジョンはポケットに手を入れた」より his, his など、よほどの特殊なコンテキストがない限り、その指示関係は明白であり、余剰と言える。ただし、「有標」は完全に消えるのではなく、必要な場合に使われる「任意的」[+optional]な選択として残るであろう。たとえば、現在ではカバータームとして「俳優」が使われているが、女性であることを示したい時は「女優」を使うし、若い女性は通常終助詞の「わ」は使わないが、女性性を強調したい時は使う。本学会がテーマとしている性差語もこの大きな流れのなかでだんだんと[+義務]から[+任意]な用法へと変化していくのではないだろうか。

[参考文献]

Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. PhD thesis, MIT.

Yano, Y. (1977) *Intersentential pronominalization: A Case Study from Japanese and English*. PhD thesis, University of Wisconsin.

矢野安剛 (1984) 「英語の代名詞化と日本語のゼロ代名詞化：その平行性」『学術研究』33号、57-69.

[資料]

星伸一(1972)『ノックの音が』講談社.

Hoshi, S. (Trans. S. H. Jones, 1984) *There Was a Knock*. Kodansha International.

(やの やすかた・早稲田大学 名誉教授)

『キャッチャー/ギャツビー/ティファニー』の「僕/私/あたし」：
村上春樹の翻訳とジェンダー

斎藤理香

村上春樹は、翻訳をする小説家で、創作をする翻訳家でもある。ここではそんな村上の創作における「翻訳文体」の特徴を概観し、その翻訳（和訳）のジェンダー表現、特に男性一人称とその視点から語られる人物像、女性表象について考察した。村上訳の作品は、D.J.サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（2003）、スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』（2006）、トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』（2008）をとりあげた。

村上春樹の翻訳と「翻訳文体」

村上春樹の翻訳は、基本的に、英語（起点言語）の直訳的表現を日本語（目標言語）の文脈に積極的に取り込み、自然さと自明性に慣らされた日本語表現に揺さぶりをかける、起点言語志向の翻訳（または欧文脈）、いわゆる直訳的翻訳に近い。しかし同時に日本語にして「違和感を感じるといったら、翻訳者は自分の判断で変えていいんじゃないか」（同 2000:62）という目標言語志向を意味する発言もしている。つまり、村上にとって翻訳とは、翻訳を通じて「文学的・文章的に学ぶ」（村上・柴田 2000:87）ためのもの、創作のための翻訳だと解される。

村上の小説の文体はディタッチメント（超然?離脱?）を想起すると言われ、翻訳の直訳体を媒介とした日本近代文学における変革の文体と重なるのだが、一方で彼は、日本文学が受容しなかった、三人称単数の人称詞 he, she をそのまま「彼、彼女」として自らの文体に取り込んでいった。村上は翻訳のコツを「エゴみたいなものを捨てること」（村上・柴田 2000:63）だと述べている。小説家としてのエゴを後方に追いやり、創作する自分を外側から眺める視点を得ることで、文体のディタッチメントが生まれ、私小説の枠には収まらない「僕」の一人称小説が書かれたのではないだろうか。このように、村上の翻訳文は、彼の創作の文体とセットでとらえることができる。

ジェンダー表現と小説の文体

日本語のジェンダー表現と創作における問題は、性差表現が過度にステレオタイプ化され、男女のイメージを固定化してしまうことにある。英語から日本語に翻訳された小説では、さらに性差表現が増幅する可能性が高くなる。英語の I や she や he が、日本語では頻出しない人称詞、「私」「僕」「彼女」「彼」と訳出されることがある一方で、日本語文では特に言わなくてもいい「私」や「彼」の代わりに、会話部分に文末詞の性差表現が余分に持ち込まれることがあるためだ。日本語とジェンダーの実証的研究によって、実際は必ずしも女性が「女性らしく」男性が「男性らしい」言葉遣いをするわけではないことがわかっているが、それは金水敏（2003）によれば「役割語」としてフィクションの世界に登場するのである。こういうステレオタイプ化という現象に加え、ステレオタイプを補強する社会的規範が作用している可能性があることも重要である。

以上のような翻訳、文体、ジェンダー（性差）表現についての論点をふまえ、村上春樹の翻訳作品の「僕」一人称の語り、また登場人物のセリフの一人称を文例を交えながら考察した。

（さいとう りか・ウェスタン ミシガン大学 准教授）

女ことばと翻訳：
理想の女らしさへの文化内翻訳

古川 弘子

日本語で書かれた文学作品では、女ことばによって女性登場人物の女性性が強調されている。この傾向は、文学のみならず他のメディア（テレビ番組、雑誌やマンガなど）でも同様に見られ、言文一致運動が起こった19世紀後半から続いてきた（因, 2007, 2010; Inoue, 2003, 2004; 水本, 2005, 2010; 上野, 2003; Levy, 2006; 中村, 2007a, 2007b）。

外国語から日本語への翻訳を考えてみると、日本語の女性文末詞は翻訳テキストでも過剰に使われ、女性登場人物の女性性が強調されている。これは翻訳者の持つ言語規範が翻訳に影響を与えているからだと考えられる。英文 'I will run.' からはその話し手がどれだけ女らしいか、または男らしいかを特定することはできない。しかし日本語では、翻訳者の文末詞使用によって「走るわ」「走るの」「走る」「走るよ」「走るぜ」と、話し手の印象が女らしさや男らしさの細かいレベルまで決められる。中村（2010：23）は、現在最も典型的な女ことばが見られるのは翻訳テキストであると指摘するが、女ことばの多用によって女性登場人物の女性性が強調されるために、翻訳された作品と原書との印象に大きな差を生み出すことが考えられる。また、文学作品で多用される女ことばは、社会におけるジェンダー・イデオロギー—社会で女性や男性がこうあるべきとみなされている信念や知識—と深く関わっているといえる（中村, 2007b 他）。

筆者はこれまで、日本語で書かれたり日本語に訳されたりした文学作品の中で女性性がいかに強調されているかを分析し、イデオロギーとしての女ことばと翻訳との関わりについて知るために、1990年代に出版されたテキストを中心に定性的・定量的研究手法の組合せによる文末詞研究を行ってきた。ここではオカモトとサトウ（1992）の言語学研究を翻訳研究に応用し、新しいアプローチによる研究を行った。本稿では、これまで分析してこなかった2000年以降に翻訳されたテキストにおける女性登場人物の文末詞使用を同様の研究手法で分析し、以下5点について考察した。

- (1) 現代の日本人女性と翻訳テキストにおける女性登場人物の文末詞使用の比較
- (2) 女性主人公とその他の女性登場人物との文末詞使用の比較
- (3) 女性主人公の成長と文末詞使用の考察
- (4) 1990年代と2000年代の翻訳テキストにおける文末詞使用の比較
- (5) 翻訳テキストと映画字幕との文末詞使用の比較

さらに、女ことばとイデオロギーとの関連性を論理的に示し、この女らしさを強調する傾向、本稿で定義する「文化内翻訳」が、日本社会でジェンダー・イデオロギー強化のために重要な役割を果たしてきたということを議論した。

[参考文献]

Inoue, M. (2003). Speech without a Speaking Body: 'Japanese Women's Language' in Translation. *Language & Communication*, 23: 315-330.

- (2004). Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of ‘Japanese Women’s Language’. In S. Okamoto and J. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*. (pp. 57-75). New York: Oxford University Press.
- Levy, I. (2006). *Sirens of the Western Shore: The Westernesque Femme Fatale, Translation, and Vernacular Style in Modern Japanese Literature*. New York: Columbia University Press.
- Okamoto, S. and S. Sato. (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference, April 4 and 5, 1992, Vol.1*. (pp. 478-488). Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.
- 上野千鶴子(2003)『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社
- 因京子(2007)「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い—女性ジェンダー標示形式を中心に—」『日本語とジェンダー』第7号
http://www.gender.jp/journal/no7/02_chinami.html (2013年2月22日)
- (2010)「マンガ—ジェンダー表現の多様な意味」中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』(pp. 73-88) 世界思想社
- 中村桃子(2007a)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
- (2007b)『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』NHK出版
- (2010)『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- 水本光美(2005)「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』第5号
http://www.gender.jp/journal/no5/3_mizumoto.html (2013年2月22日)
- (2010)「テレビドラマ—“ドラマ語”としての「女ことば」」中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』(pp. 89-106) 世界思想社

(ふるかわ ひろこ・東北学院大学講師)

中国語のオネエ言葉をめぐる現象と特質

河崎みゆき

要旨：中国でいままで研究対象として考えてこられなかったオネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」を北京大学コーパスおよび映画・テレビなどの映像資料、ネットの書き込みなどから分析、言語面の特徴、歴史的な角度と社会的な角度から中国のオネエことばをめぐる現象を考察した。

1. 「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」の定義

「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」は「現代漢語詞典」（商務印書館）にも載っていない言葉であるが、一般的な成人中国人でこの言葉を知らない人はいないだろう。

ネット上辞書「互動百科」によれば、「娘娘腔は主に男性が女性のような弱弱しい声で話す声やトーンをいい、多くは男性の挙止が女性化していることを指し、古代の娘娘（皇后、宮妃）に似ていることから「娘娘」の腔（喋り方）と呼ばれる。けなし言葉」と説明されている。

2. 研究内容与方法

この言葉は現代のメディアの中でも、しばしば使用されており、日本語の「オネエ言葉」に当たる。筆者は、博士論文「汉语角色语言研究（中国語の役割語研究）」（河崎 2013）の中で人物像と言葉の結びついた中国伝統の「役割語」の一つとして、官腔（役人言葉）、書生腔（学生言葉）、娘娘腔（オネエ言葉）に注目、考察を行ったが、特徴として、非言語的要素が大きいことがわかった。娘娘腔は中国でも先行研究がほぼなく、データは、北京大学中国語学研究中心Center for Chinese Linguistics PKU(略称 CCL コーパス)、及びインターネット上の書きこみ、TV 番組や映画などから収集、非言語行動についてはそれらの観察と一部アンケート調査を行った。

3. オネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」の特徴

「娘娘腔」の言語的特徴は日本語ほどは明らかではないが、曹志贇（1987）李清（2006）河崎（2011）で指摘された若い女性ことばの特徴が利用され（例、語気詞の多用、自称詞「人家」の使用、感嘆詞など感情的色彩の濃いことばの使用など）、映画やドラマのオネエキャラの演出に使われている（例、『非誠勿擾（邦題：狙った恋の落とし方）』2008年馮小剛監督）。

北京大学 CCL 古代語コーパスでは民国時代の用例が一つあるだけだが、実際は「娘娘(皇后)」から来ているのであれば、清朝にはあったと推測できる。

実際、中国の人々のイメージの中でオネエことばを話すのは、清朝の太監（宦官）があり、映画（『大太監李蓮英』1991）などでも繰り返し、か細く女々しい声（娘娘腔）で話す代表として描かれている。2012年に放送されたドラマ『大太監』で、「娘娘腔」が使われなかったことが話題になったほどで、宦官に対する偏見が定番化していたことがわかる。

音声などの特徴以外にオネエ言葉の周辺には、服装、化粧、髪形、歩き方、振る舞い、目線等の非言語的要素があるが、特に小指の動作（蘭花指）、髪の毛をいじる、内また歩きなどは娘娘腔の代表的非言語として使用されている。「髪いじり」は、ドラマなどで使用される若い女性の非言語役割語である。

4. オネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」をめぐる史的角

歴史的には中国の男性女性化は次の5つの角度から考察できる。

- 1) 漢の時代に芽生え、魏晋南朝には流行したされる「男扮女装」
- 2) 伝統演劇での「反串」（実際の性と反対の性を演じること）
- 3) 男性が女性に仮託して書いた詩文などの文学（例えば、六朝宮体詞宮体詞、五代十国時代《花間集》、晩唐・温庭筠「菩薩蛮」の「懶起画峨眉、弄粧梳洗遲」など）
- 4) 「娘娘腔」が指す太監（宦官）や現代のオネエ（言葉）、メイクアップアーティストのことば
- 5) 日本のアニメやゲームからの影響で、主に男子のコスプレ現象を表す「偽娘（ウェイニャン）」

「偽娘」は美しいコスプレであり、「娘娘腔」にある弱弱しい女男をイメージさせるものではない。また「偽娘」は、もはやけなし言葉でも、嘲笑いの対象でもない。こうした言葉の変化から、中国社会の価値観の多様化への努力が見てとれる。

5. まとめ

中国のオネエことば「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」は、主に服装や髪の毛、手真似などの非言語行動と、若い女性ことばの特徴を模倣した男性女性化の現象である。漢代にめばえ魏晋南朝には流行したされる「男扮女装」や芸能、文学史上女性に仮託して書かれた詩文にもさかのぼって考えることができる。日本のACG（アニメやゲーム）などからの影響もうけながら、その評価に揺り戻しはあるものの、芸能の世界で表現力を増やしたり、社会の価値観の多様化に対応する現象として、今後も注目に値すると考える。

本発表は、博士論文「中国語の役割語研究」の一部を単独論考としてまとめなおしたものである。

参考文献

- ・ 陈宇浩（2009）“小沈阳咋不像“小沈阳”嘍？”「今日早报」
- ・ 胡颖佳（2012）「论明代戏曲中的“男扮女装”现象——以《赠书记》为例韶关学院学报『社会科学』第33卷第5期
- ・ 河崎みゆき（2011）「中国の若い女性のことばを探る—中国男女口癖調査を中心に」『日本語とジェンダー』第11号
- ・ 李箐（2006）「论女性话语风格」华中师范大学 修士論文
- ・ 张明辉（2011）「解读伪娘」『唐山学院学报』24号
- ・ 水本光美（2005）「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター文末詞（終助詞）使用実態調査の中間報告より」『日本語とジェンダー』第5号
- ・ 中村桃子（2010）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- ・ 徐蔚（2007）「男旦：性別反串—中国戏曲特殊文化现象考论」厦门大学博士論文

（かわさき みゆき・上海交通大学日本語学科講師）

小説タイトルの翻訳とジェンダー：
『ボヴァリー夫人』について

三原智子

日本でフランス文学が翻訳されてからまもなく150年がたとうとしている。以来、翻訳者たちは、異なる文化を背景にした小説を異なる言葉を用いて日本に紹介するため、原文に変更を加えることをしばしば強いられきた。本発表ではその中でも特に、小説のタイトルの翻訳について、ジェンダー視点より検証してみた。

翻訳によってタイトルに「女性性」が付け加えられた最も有名なフランス小説の例は、ギー・ド・モーパッサンの *Une vie* であろう（直訳すると『ある生涯』）。この小説の日本語タイトルは『女の一生』、つまり英語訳を介して日本語に訳される際、原文には存在しないジェンダーについての示唆が加えられた。逆に、翻訳によって、原文に存在した含意が消えた例としては、オノレ・ド・バルザックの *La cousine Bette* を挙げることができる。日本語タイトル『従妹ベット』は原題を直訳しているものの、*Bette* の同音異義語から連想される女性蔑視的なニュアンスは消えている。

では、フランスの同じく19世紀の小説家、ギュスターヴ・フローベールの *Madame Bovary* はどうであろうか。日本では『ボヴァリー夫人』と訳されるのが通例であるが、この題名は原文を忠実に訳しているといえるだろうか。

一見すると、前述の例に比べ『ボヴァリー夫人』は目をひくような含意を原文に加えていない。主人公エンマ・ボヴァリーの敬称を採ったシンプルなタイトルは、意識のしようがないかのようにも見える。しかし、実際には、「madame」を「夫人」と訳すことは決して自明のことではない。それは、小説テキストのなかにも出現するさまざまな「madame」をとりあげ、それらがどのように訳されているかを見ることで明らかになる。

たとえば、フランス語の原文において「madame」が単独で用いられる場合、この語が翻訳版において「夫人」と訳されることはまずない。代わりに「奥さん」などの訳語が使われる。名前前につけられる場合でも、「〇〇夫人」だけではなく「〇〇のおかみ」、「〇〇の奥さん」などの訳が頻繁に用いられる。訳が省略されることさえある。これは、フランス語と日本語の自由間接話法の使用の違いによるものである。また、両言語における、語の繰り返しについての感受性の違いにも起因している。

このように、翻訳者たちはさまざまな理由から、小説の中の「madame」を訳し分けることを余儀なくされる。しかし、それにもかかわらず、主人公である「madame Bovary」については、一貫して「ボヴァリー夫人」という訳を採用する。なぜなら、この訳語は、「ボヴァリーの奥さん」にも「ボヴァリーさん」にもない、特殊な意味を帯びているからである。すなわち、『ボヴァリー夫人』という小説のタイトルは決して無作為なものではなく、日本の文学の歴史的な文脈のなかで、ある種の紋切り型の「女性性」を含意しているのである。

(三原智子 みはらともこ 群馬大学准教授)

日本語 OPI から考える日本語教育とジェンダー

銭坪玲子

1. 目的

日本語 OPI に関するジェンダー的側面からの批判的考察を通して、日本語教育におけるジェンダー的視点の導入について考えたい。

2. 日本語教育と日本語 OPI

近年、外国語教育においては、実際の運用力の育成を中心とした学習や教育手法を求める動きが活発である。これらは、従来の文法重視及びペーパー試験重視の教育に対する反省から出てきたものである。日本語教育も例外ではなく、「プロフィシエンシー」が近年のキーワードの一つとなり、日本語会話のプロフィシエンシーを測定する日本語 OPI が登場するなどしている。また、国際交流基金は JF スタンダードを構築し、1984 年以来実施されてきた日本語能力試験は、課題遂行能力の測定を軸に 2010 年から問題内容等が改定される運びとなった。

このような潮流のなかで、日本語教育という領域において、「プロフィシエンシー」重視という一つの方向性を明確に指し示したという点において、日本語 OPI が果たした功績は小さくない。しかし、近年、OPI に対する批判的考察も登場しており、いまだ議論の余地は多く残されているといえるだろう。例えば、宇佐美 (2009; 2013)、山田 (2013) では、言語テストとしての妥当性や信頼性という側面から、OPI について批判的な考察が加えられている。日本語会話能力を評価する際、評価の軸をどこに、どのように設定するのが問われているといえるだろう。

3. 日本語 OPI とジェンダー的問題

牧野 (2010) は、1980 年代後半から批判の対象とされてきた OPI の海外の状況について紹介し、それらを 4 つに整理している。1. 基準の有効性、2. 母語話者の判断の多様性の否定、3. タスクの幅の狭さ、4. テスターと被験者に存在する権力関係、である。銭坪 (2010) では、おもに 4 について、ジェンダー的視点から考察を加えた。結果、日本語超級レベル判定においては敬語とくだけた表現、二つの抽出が必須とされているが、「現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとりで終始することができるかどうか」(牧野 1999) が大切だといわれる OPI において、テスターが女性である場合、日本社会で超級レベルのタスクを適切に実施することは困難であること、それはテスター個人の技術力不足といった問題ではなく、社会的属性、すなわち現代日本社会におけるジェンダー的非対称性に起因するものであることを明らかにした。

4. ジェンダーをめぐる歴史社会学的視点及び社会理論

中村 (2012) は、「女ことば」についての調査・分析を通して、「女ことば」と日本近代国家形成の密接な関係性について明らかにした。「女性」や「女性性」というものが、時代によって、政治や経済に利用されてきた姿を描き出している。岡本 (2008) は、古代から女性は「女らしい」ことばを使うべきであるという支配的な言語イデオロギーが日本にはあったということ、そして、それぞれの歴史的背景の中で、そのイデオロギーが様々な政治的意義を与えられて再生産されてきたことを明らかにしている。

これらの研究にみられる視座は、1980年代以降の学問的趨勢の延長線上に位置づけられるだろう。なかでも、フィリップ・アリエスに代表されるアナール学派による社会史研究、歴史社会学の成果は、日本の近代家族・ジェンダー・子供研究等に大きなインパクトを与えてきたといわれる。以降、日本の近代家族も、歴史社会学的あるいは構築主義的な考察の対象となってきた。いまでは、日本の近代家族も、時代に応じて形態やイデオロギーが変化し、地域や社会階層によっても様々に姿を変えるものであったということが、先行研究から明らかとなっている。また、これらの近代家族研究は、ジェンダー研究とも密接な関係にある。

また、これらのマクロ的視点からの分析のみならず、江原（2006）によれば、ミクロ的視点から、ジェンダーを考察しうる社会理論も近年相次いで登場してきている。例えば、ゴッフマンやギデンズ、ブルデューの理論等は、日常生活における行為の場面に着目するものであり、日常的実践の積み重ねが、権力構造を再構築・再生産している様相を指摘しうるものであるという。

これらの歴史的あるいは社会構造的側面からのアプローチを積極的に取り入れることは、日本語教育とジェンダーについて考えていくためには必要な作業なのではないだろうか。

5. 今後の課題

これまでのジェンダー研究の知見を日本語教育にいかに導入すべきか、定まった見解はまだない。水本（2013 他）、渡部（2006）は、既存の日本語教材をジェンダー的視点から分析し、ステレオタイプ的で性差別的描写が多くみられるということを示した。そして、内容が修正された、新しい日本語教材の開発を求めている。対して、小川（2006）は、実際に男女差が存在するのだから、「男女の話しことばの相違を教室で取り上げることが不可欠」だという。社会の現状をどのように捉え、また、それらを日本語教育にどのように反映させていくのか、今後継続した議論が待たれるところである。宇佐美（2008；2009）は、自然会話の分析を通して、自然会話を素材とした教材を開発する必要性について述べている。第二言語教育では、学習者は目標言語・文化の成員に近い「見積もり」を獲得することが必要だという。しかし、性別等の不均衡が存在する社会であった場合、その文化の「見積もり」を獲得することが第二言語教育においてどのような意味を持つのか、改めて議論する必要があるのではないだろうか。好井（2012）によれば、会話録音による会話分析から映像を文字化するという相互行為分析が主流になりつつある現在、「分析者」あるいは「分析する」という行為さえも自明なものではなくなりつつあるという。つまり、会話分析も実証主義的分析ではなく、解釈学的な解釈と見なされるようになっているのである。ここでは、抽出される「自然会話」すらも、分析者のある種の解釈に基づいた選択の一つにすぎない、ということになるだろう。

国際交流基金の調査によれば、2009年現在、日本語教育は133か国においておこなわれており、日本語学習者は約365万人だという。学問的言説や成果が一定程度の社会的機能をもつと同様、言語学習における教育や評価、教材の在り方は、学習者や言語観の形成に少なくない影響を与えらると思われる。日本語 OPI に代表されるような、日本語能力の評価におけるジェンダー等の取り扱いについては、いまだ課題が多い。今後、日本語教育において、誰が、どのような日本語（教育）を提唱していくのか、また、その中にジェンダー的視点をどのように取り入れていくのか、検討を重ねていく必要があるだろう。

[参考文献]

- 宇佐美まゆみ (2005) 「ジェンダーとポライトネス-女性は男性よりポライトなのか?-」『日本語とジェンダー』第5号、日本語ジェンダー学会
- 宇佐美まゆみ (2009) 『『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシェンシー』鎌田修他『プロフィシェンシーと日本語教育』ひつじ書房
- 宇佐美まゆみ・山田ボヒネック頼子・堀恵子 (2013) 「コミュニケーション能力評価と談話研究の連携と課題-高等能力試験の談話の分析結果から-」『2013年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 江原由美子「ジェンダーと構造化論-ギアズ、ブルデューを中心に」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣
- 岡本成子 (2008) 「日本語における女性の言葉遣いに対する『規範』の再考察」佐藤慎司他編『文化、ことば、教育-日本語/日本の教育の「標準」を越えて-』明石書店
- 小川早百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識-日本語教育での活用へ向けて-」日本語ジェンダー学会編、佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 坂本佳鶴恵 (2006) 「ジェンダーとアイデンティティ-ゴッフマンからバトラーへ」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣
- 銭坪玲子 (2010) 「日本語 OPI の超級ロールプレイとジェンダー的問題」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』,8(1), pp.43-48.
- 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』岩波書店
- 牧野成一監修 (1999) 『日本語改訂版 ACTFL-OPI 試験管養成用マニュアル (1999年改訂版)』アルク
- 牧野成一 (2010) 「これから20年後のOPIのあるべき姿」日本語OPI研究会『日本語OPI研究会20周年記念論文集・報告書』
- 好井裕明 (2012) 「会話分析」『現代社会学事典』弘文堂
- 渡部孝子 (2006) 「日本語教材とジェンダー」日本語ジェンダー学会編、佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 国際交流基金「2009年海外日本語教育機関調査」
(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey_2009/2009-01.pdf 2013年6月15日アクセス)

本稿(本報告)は、科学研究費助成事業若手研究(B)(課題番号23720278)による研究成果の一部である。

(ぜにつば さちこ・長崎ウエスレヤン大学専任講師)

裁判例に見られるジェンダー・バイアス：
「母親」「母性」「父親」「父性」の比較

加藤直子

我が国の司法にはジェンダー・バイアスが存在し、人権救済の最後の砦である司法においてジェンダー・バイアスが存在することは見過ごせない人権侵害である（第二東京弁護士会両性の平等に関する委員会 1999）。

ジェンダー・バイアスの中でも、育児は母親によってなされるべきという母親に関する固定的観念は日常生活の中に当たり前のように根強く存在しているが、セクシャルハラスメントやドメスティックバイオレンスのように犯罪性のあるものではないため見過ごされがちである。実際に、母親に関する固定的観念の現れとして、我が国の裁判において乳幼児の親権者を指定する際、母親を優先する傾向がある。これは司法におけるジェンダー・バイアスであると指摘されている（棚村・色川 2009）。

母親に関する固定的観念が女性に対する差別であるという視点は、人権救済の最後の砦である司法には必要であり、決して軽視できないものである。

本発表は、ジェンダー・バイアスである母親に関する固定的観念が、裁判例の中でどのように表現されているのか探索することを目的とする。母親に対する固定的観念が現れやすいと言われている我が国の親権者を指定する裁判例を分析対象とし、「母親」という語の共起語を分析することで母親に関する固定的観念がどのように表現されているのか分析する。

分析方法は、親権者を指定する裁判例において、「母親」「母性」と対になる語である「父親」「父性」のいずれかが含まれる裁判例を検索し、「母親」「母性」「父親」「父性」が含まれる文脈において表現の選択に対象者のジェンダーが影響しているか比較した。裁判例は、過去 10 年のものに絞り、判例検索サイトである判例秘書 INTERNET で検索を行った。「母親」「母性」「父親」「父性」のいずれかの語が含まれる裁判例は 89 件あり、この 89 件を分析対象とした。

一例として、親権者を指定する裁判例において「母親」という語を含む文脈には、以下のものがあった。

「未成年者の年齢が 4 歳であって、一般的には母親のもとで養育されるのが自然な年齢である」（東京高決平成 24 年 10 月 5 日判例タイムズ 1383 号 327 頁）

「母親」という語は、「未成年者」「養育されるのが自然」という表現と共起しており、このような表現から育児は母親によってなされるべきという母親に関する固定的観念を読み解くことができる。分析対象である裁判例を全て確認した結果、親権者を指定する裁判例において、「母親」という語は、「幼児」「年少」「未成年者」「養育」「監護」という表現と共起しているという特徴がみられた。一方、「母親」と対になる「父親」という語は、同様の特徴がみられなかった。

「母親」という語は、親権者を指定する裁判例において、「幼児」「年少」「未成年者」「養育」「監護」という表現と共起することによって、母親に関する固定的観念と結び付けられているのである。

[参考文献]

棚村政行・色川雅子（2009）「家事事件とジェンダー」第二東京弁護士会両性の平等に関する委員会司法におけるジェンダー問題諮問会議（編）『事例で学ぶ司法におけるジェンダー・バイアス改訂版』明石書店，87-117.

[参考サイト]

第二東京弁護士会両性の平等に関する委員会（1999）『司法におけるジェンダーバイアス』
<http://niben.jp/or/ryosei/gender/sassi/sassi.html>（2013年6月10日最終閲覧）
判例秘書 INTERNET（<https://www.hanreihisho.net/indexjp.html>）

[参考判例]

東京高決平成 24 年 10 月 5 日判例タイムズ 1383 号 327 頁

（かとう なおこ・お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻）

日本語教科書に盛り込むジェンダー意識
教科書作成の経験から

佐々木瑞枝

筆者はこれまで日本語教科書の執筆、監修などにあたってきた。日本語の教科書にどんな項目を盛り込むかは筆者や監修者の責任であり、その結果、学習者は教科書の項目を学ぶ中で必然的にジェンダー意識を築きあげていくと思われる。

本発表では、これまで執筆した教科書の中に盛り込んだ「ジェンダー項目」に関する考察を行う。今後の教科書作成について参考になればと考えている。

ここでは著書を 1.日本語・日本文化関連の教科書、2.日本語副教材、3.日本語問題集の 3 つに分類し、その中から数冊を取り上げて言及したい。

なお筆者には『日本語ジェンダー辞典』（東京堂）、『あいまい語辞典』などの辞典類および『外国語としての日本語』、『日本語を外から見る』、『女の日本語 男の日本語』などの日本語に言及した著書があるが、ここでは取り上げないものとする。

1. 日本語・日本文化関連の教科書（出版年代順）

- ① 『日本事情』（日本語・英語対訳版）単著 北星堂書店 1987年 233 ページ
日本事情の教科書として韓国語版・中国語版も出版された。
- ② 中国版 『日本世情』単著（中国語対訳・簡体字版）外国語教育与研究出版社（北京）1995年 331 ページ
台湾語版とは異なる簡体字版であり、現在も書店に山積みされ中国の大学で使われている。
- ③ 台湾版 『日本事情日語学習叢書Ⅱ』単著 中国語対訳版 致良出版社（台湾）1995年 286 ページ
日本語と英語の対訳版の英語の部分が中国語訳となっている。
- ④ 『日本社会再考』共著：門倉正美 北星堂書店 1991年 572 ページ
中上級用日本語テキスト。日本の社会について 38 項目のタイトル、英文翻訳、難しい漢字、同音異義語、フィールドワーク、グループディスカッション、グラフィリーディングなどさまざまなコミュニケーション・アプローチの手法による問題文を載せている。
- ⑤ 『日本事情入門（英文訳版）』単著 アルク出版 1995年 100 ページ
外国人に日本を紹介するため、写真と英文翻訳つきである。
- ⑥ 『日本事情日語学習叢書Ⅱ』単著 中国語対訳版 致良出版社（台湾）1995年 286 ページ、日本語と英語の対訳版の英語の部分が中国語訳となっている。
- ⑦ 『日本事情入門』単著（ハングル対訳版）1995年 100 ページ
アルクで出版された『日本事情入門』の韓国語版である。
- ⑧ 『会話の日本語』共著：門倉正美、ジャパントイズム 1996年 192 ページ
初級テキストで習得した日本語の文型をいかに実際の会話場面で運用できるかを考

慮して作成した 日本語のテキストである。(韓国語版・中国語版がそれぞれの国で頒布されている)

- ⑨ 『会話の日本語ードリル&タスク』(共著 門倉正美) ジャパンタイムズ 1997年 197ページ

初級テキストで習得した日本語の文型をいかに実際の会話場面で運用できるかを考慮して作成した 日本語のテキストとに共に使用するドリルとタスクである(韓国語版・中国語版がそれぞれの国で頒布されている)。

- ⑩ 『日本語ことはじめ』単著 北星堂書店 1999年 117ページ

日本語の初級学習者に必要な文法事項、日本の文化について、英文の解説を入れた。海外で日本語を勉強したり、短期集中で日本語を学習するためのテキストである。

- ⑪ 『アカデミック ジャパニーズ』(共著) ジャパンタイムズ 2001年 127ページ

日本語の文法力、読解力などの受信型スキルを伸ばすだけではなく、学習者自身が考え、その場の状況を考えながらコミュニケーション・発表する「発信型スキル」を伸ばすことを目標としたテキストである。

- ⑫ 『新世紀文化日本語教程』(監修) 外語教学研究出版社(北京) 2005年

中国精華大学教授の依頼を受け、本文、会話文、語彙、文法解説、練習問題、日本文化、について、監修作業を行った。

- ⑬ 『改定新版 会話のにはんご』(共著) ジャパンタイムズ 2007年 本文190ページ、スクリプト39ページ

本書は「会話の日本語」(1996年)、「会話のにはんご、ドリル&タスク」(1997年)の2冊を改定し、「この課で学ぶこと」、CD、教師用指導書などを加えて新しく一冊にまとめたもの。例文やドリルを大幅に修正することで、さらに楽しいクラス活動が可能になったと思う。

- ⑭ 『自然な日本語1 初級編』単著 台湾 大新書局出版社 2008年 118ページ

台湾における日本語教科書として出版した。

- ⑮ 『自然な日本語2 中・上級編』単著 台湾 大新書局出版社 2008年 118ページ

教科書を執筆・監修する際には、「会話文の内容」「男女の言葉遣い」「イラストの扱い」など、ジェンダーを意識することなしには、作成できない。しかし、「ジェンダー」という項目を盛り込むことは、編集上難しい場合が多い。

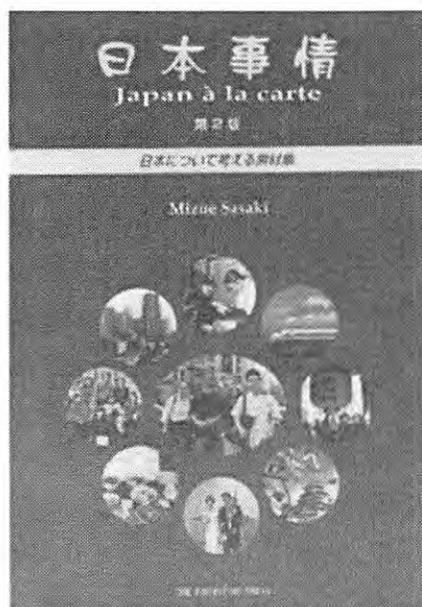
上記の教科書の中で、1987年出版の『日本事情』、1991年出版の『日本社会再考』、1999年出版の『日本語ことはじめ』、2001年出版の『アカデミック・ジャパニーズ』、2006年出版の『大学生のための日本語ライティング』、2007年出版の『改定新版 会話のにはんご』の中では、特に「ジェンダーに関するトピック」の項目をもうけている。

1.1 『日本事情』

この教科書を出版したのは以下の理由による。

1. 多くの大学で「日本語・日本事情」の指導が始まっていたが、留学生用の「日本事情」のテキストが世に出ていなかった。
2. 「日本事情」の指導項目については、指導担当者にまかされ、「日本の先端技術」「日本の民話」など、指導担当者の専門領域が論じられることが多かった。
3. 「日本事情とは何か」が論じられていた時期でもあり、筆者なりの「日本事情」をまとめてみ

たいと考えた。



本書のⅥ章は「日本人の社会と生活」の章であるが、その中の一つの項目として「男女雇用機会均等法」を取り上げている。英文対訳の本であるので、英語の Equal Opportunities for Women は中国版、台湾版、韓国版でもそれぞれの言語で翻訳されている、

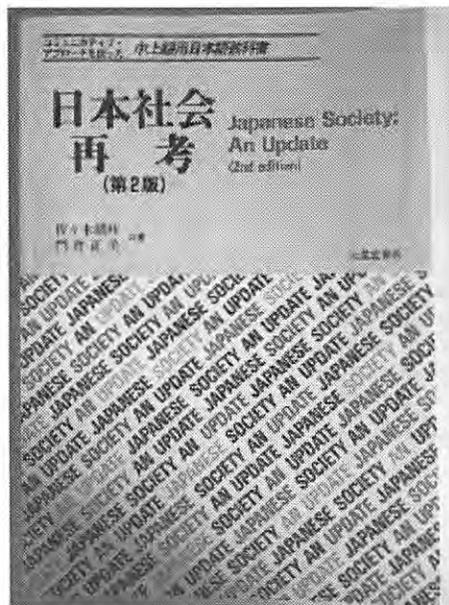
この章では 1986 年 4 月から実施された法律「男女雇用機会均等法」を紹介した上で、以下のような文章を掲載した。

「男は仕事、女は家庭という概念が日本の社会全体に広くいきわたっているため、法律ができたからといって急に女性の課長が多く出現するとは思えない。……女性が男性と肩を並べて仕事をしていくためには、まず私たちの意識から変えていかなければならない
……。」

『日本事情』が出版されてから 25 年以上の時が流れて、女性の社会進出が目立つようになったものの、いまだに家事育児をする男性が「イクメン」という言葉で表現されるほど稀なことであり、女性たちに家事・育児がまかされているというのが、21 世紀になっても続く日本社会の現状と言える。

1.2 『日本社会再考』

この教科書には「コミュニカティブ・アプローチを使った中上級用教科書」というサブタイトルがついている。



門倉正美氏との共著で、執筆は分担したが、目次作成やタスクについては二人で話し合っ
て決めた文字通りの「共著」である。

目次の中に「女性と差別」という項目を設け、次のようなことを学習者に考えさせるタスクを
盛り込んでいる。

●内容質問

- 1.女性の性役割分担と言われるものを三つあげなさい。
- 2.職業を「腰掛」ととらえる、とはどういう意味ですか？
- 3.キャリア・ウーマンの意味は何ですか？

●ディベート

中学・高校で男子生徒も家庭科を必修とすべきかその必要はないかを二つに分かれて討
議しなさい。(注：この本が出版された当時は男子は家庭科ではなく、技術を受講した。
現在では男子も家庭科は必修となっている)

そのほかにも、長文で20代の未婚の女性、40代の主婦、50代の男性を登場させ、夫婦役割分
担をどう変えていくかというテーマのロールプレーなどを載せている。留学生たちがこれらの文
を読み、考え、タスクを行うことで、彼らの脳裏に刷り込まれている「ジェンダーバイアス」が
少しでも変わっていくことを願って書いたものである。

2. 日本語の問題集にもジェンダー意識を盛り込めるか

これまで日本語能力試験対策や留学生試験対策の問題集を企画・監修・執筆してきた。筆者は、
多くの場合、プロジェクトチーム内で監修しながら、目次立てや全体の構成を考えるという立場
にあり、監修者の考え方で目次も変えられる、ジェンダーの視点からテキストを書く、監修する、
という経験を重ねてきている。会話文や例文の工夫、とりあげるトピックにジェンダーの視点
を生かす、などである。

- ① 『日本語パワーアップ総合問題集－レベルA』（監修）ジャパントイムズ 2000年 124 ペー
ジ

留学生が総合的な日本語力をつけることを目的に作成した問題集である。日本語能力試験の1級に対応したレベルであり、特に論説文、説明文などを多くとりあげている。

- ② 『日本語パワーアップ総合問題集－レベル B』(監修) ジャパンタイムズ 2000年 117 ページ
日本語能力試験の2級に対応したレベルであり、特に大学での講義などを多くとりあげている。
- ③ 『日本語パワーアップ総合問題集－レベル C』(監修) ジャパンタイムズ 2000年
日本語能力試験の3-4級に対応したレベルであり、特にコミュニケーション能力のレベルアップを考え、「絵から情報を得る」「予測して答える」などのタスクが盛り込まれている。
- ④ 「アカデミックジャパニーズ日本語表現ハンドブック シリーズ」(監修) アルク出版 2000年
中国語版(中国大連外国語大学)。下記の1~10のシリーズは、全て異なる著者グループのプロジェクトを編成して行なった。①『すぐわかる上級表現』107ページ ②『すぐに使える上級動詞』123ページ ③『予測して読む聴読解』136ページ ④『違いを覚える上級形容詞』84ページ ⑤『よく使うカタカナ語』117ページ ⑥『会話で覚える形式名詞』139ページ ⑦『日常会話で使う慣用表現』107ページ ⑧『表現を豊かにする副詞』120ページ ⑨『例文で学ぶ助動詞』107ページ ⑩『自然に使える文末表現』131ページ
- ⑤ 『アカデミックジャパニーズ』(共著) ジャパンタイムズ 2001年 127ページ
日本語の文法力、読解力などの受信型スキルを伸ばすだけではなく学習者自身が考え、その場の状況を考えながらコミュニケーションをとったり、発表したりする「発信型スキル」を伸ばすことを目標としたテキストである。
- ⑥ 『日本留学試験 実戦問題集－記述』(監修・共著) ジャパンタイムズ 2004年 125ページ
「日本留学試験 記述問題」のために「書く」練習を中心に構成されている。問題の題材には日常的なものから社会的なものまで広い範囲が含まれている。資料やフローチャートに独自の工夫をこらした。
- ⑦ 『日本留学試験 実戦問題集－聴読解』(監修・共著) ジャパンタイムズ 2004年
「日本留学試験 聴読解問題」のために「聴く・読む」練習を中心に構成されている。問題の題材には日常的なものから社会的なものまで広い範囲が含まれている。視覚資料を見ながら音声を聞き質問に答えるという新しい形式の問題から構成されている。
- ⑧ 『日本留学試験 実戦問題集－読解』(監修・共著) ジャパンタイムズ 2004年
教材には日常的なものから社会的なものまで広い範囲が含まれている。第一部模擬問題、第二部トレーニング編から構成されている。
- ⑨ 大学生のための日本語ライティング(監修・共著) ジャパンタイムズ 2006年
大学で必須の「書く力」、論理的なライティング力を養成するためのテキストである。短文から段落構成、体験報告などの一般的な文章作成、そして資料を利用したレポートの書き方へと文章構成を段階的に学んでいく。
- ⑩ 『日本語能力試験 N1 文法対策』監修 高橋書店 2011年 160ページ
N1および旧試験1級の過去13回分(11年分)の試験を分析し、出題回数の多い順にまとめているので、重要なところから覚えられる。例文や説明に、言葉の自然なつながりを示す”コロケーション”を取り入れ「日本人が日頃よく使う表現」「試験によく出る表現」に厳選。複数ある「接続のしかた」は、よく使われる順に解説した。

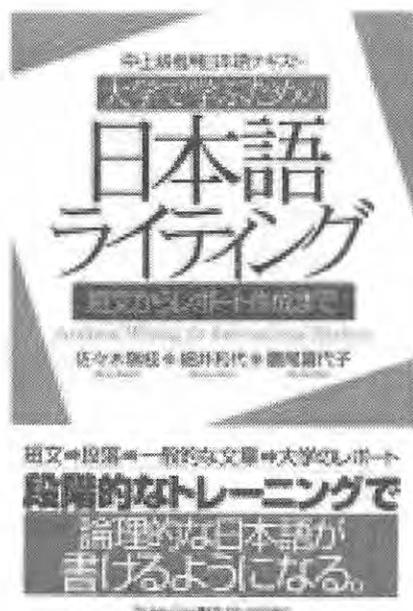
- ⑪ 『日本語能力試験 N1 総合問題集』監修 高橋書店 2011年 208 ページ

この問題集は4章に分かれている。1章の模擬テストは、実際の試験と同じ形式と問題数で構成され、2章～4章は、分野ごと（言語知識、読解、聴解）の練習問題になっている。すべての問題に解説を付した。

- ⑫ 『新日本留学試験実践問題集 聴解・聴読解』監修 ジャパンタイムズ 2011年 160 ページ

現代的な話題を盛り込んだ、新試験に合わせた前面改訂版。

ここでは、問題集の中から『大学生のための日本語ライティング』を取り上げ、問題集にも「ジェンダー意識」を盛り込んだ例を紹介したいと思う。



この問題集（テキスト）は、大学生活でのオーラルスキル（講義の聞き取りや討論、事務とのやりとりなど）の向上をめざした既刊『大学で学ぶための アカデミック・ジャパニーズ』の姉妹編である。大学の留学生を主な対象とした日本語ライティングのテキストで、論理的な日本語の文章を書くために必要な表現と構成方法を、具体的な課題を通して段階的に学ぶことを目的にしている。

全体は3つのレベルに分かれており、短文から段落の作成、体験報告・案内文・自己紹介文などの作文、そして資料を利用したレポートの書き方の演習が最終目標。大学で必要不可欠な「書く力」を養成する。下記はジェンダーの視点から執筆した一例である。

「引用してレポートを書く」には、出生率の変化（一人の女性が生む子供の数の変化）について考えるタスクを載せている。

伝えたいことが書けているか
書いていることが途中で変わっていないか
資料を効果的に使っているか
表現やことばの使い方は適切か

少子化に対する意識調査では「結婚の良い点は何か」「子育ては大変なことより楽しいことの方がおおいはずだ」などの質問や考え方について意見を述べるようになっている。

最終的には「日本の人口構成の変化」「出生率の変化」「少子化の原因」「ライフスタイルの変化」「厚生労働省の少子化に関する意識調査」などを踏まえて、留学生自身がレポートを完成できるよう導いている。

3. まとめ

日本語の教科書や問題集を監修・執筆するにあたり、日本社会の文化的側面として「ジェンダー意識の変容」「ジェンダーバイアス」などを直接的・間接的に取り上げることは可能であると考え、また拙著ではそれを実践してきた。

これらのささやかな試みが少しでも日本社会のジェンダー問題を考えるきっかけになれば幸いである。

(ささき みずえ・武蔵野大学名誉教授)

Gender in Japanese Language Textbooks: Modern Society and Teachers' Awareness*

Terumi Mizumoto

*日本語訳あり

Keywords: Japanese language textbooks, female sentence-final particles, Japanese language teachers, gender ideology

4. Introduction

For students of Japanese, textbooks are not only a means to learn the language, they also play an important role in learning about Japanese society and culture. Among students outside Japan who have no actual experience of living there, there is especially a strong likelihood that they will accept the images of Japanese people and society portrayed within their textbook as real depictions of modern Japan. However, descriptions influenced by concepts of traditional gender ideology can be found in many of the textbooks now widely used in Japanese language education. For example, many of the young female characters appearing in Japanese language textbooks continue to use what are known as “female sentence-final particles” in spite of the fact that such particles have disappeared from conversational, plain-form Japanese speech in actual everyday use. This unnatural language usage has remained uncorrected for some time now in textbooks.

In order to grasp what sort of awareness Japanese language instructors who are using these textbooks in an pedagogical environment have regarding gender, and to see how they are teaching it, I conducted a survey via questionnaire of 200 Japanese language educators. Where the survey revealed an outstanding difference between the answers given by instructors in Japan and Korea and those in Europe was in the section covering the use of female sentence-final particles. In this paper, I aim to find out how Japanese language instructors have grasped the results of research into female sentence-final particles in textbooks done by Mizumoto et al. (2009), and well as investigating how they are teaching these particles in the pedagogical environment. Furthermore, I will consider why textbooks have been so sluggish in reacting to changes in the language, and put forward a proposal for textbooks in the future.

5. Previous Studies: Comparative Analyses of Japanese Language Textbooks and Natural Speech

The main research into female final-sentence particles began in the Nineties. Prior research has reported that use of final-sentence particles such as “~wa” and “~kashira” is in decline (Kobayashi, 1993; Ozaki, 1997; Nakajima, 1997; Ogawa, 2004). The data on natural speech used for these researches were collected from the early to mid Nineties, so as a period of ten years sees a generational change, Mizumoto (2006) decided to collect her own original data between 2004 and 2006 (for details of the survey methods, see previous research).

The female sentence-final particles covered in the previous research (Mizumoto, 2006) were mainly narrowed down to four varieties that are regarded as now having all but disappeared from the casual, plain-form speech of young women in their twenties and thirties, namely “~wa (yo/ne)”, “~kashira”, “N¹ + ne/yo”, and “~no yo”. Then, as a result of data gathered from 36 female speakers of standard Japanese in their twenties, thirties, and forties, Mizumoto et al. (2009) were able to confirm that the average usage rate of female sentence-final particles across the three generations was just 5.26%, and among women in their twenties it was a mere 2.36%. Seven of the survey subjects did not use the particles at all. The survey also revealed that even in cases where they were used, it was deliberately as a joke, sarcasm, or when quoting the speech of older female speakers.

On the other hand, there is little research on female sentence-final particles used in the majority of textbooks, with Kawasaki and McDougall (2003) the only research published before this author's own

research to use precise, original data. Other than that, Suzuki (2007) and Thomson and Iida (2002) have pointed out that the decline in usage of female sentence-final particles is not being properly reflected in textbooks, but both papers lack adequate subjects for analysis and data numbers.

Mizumoto (2009) then examined a total of 39 different teaching materials published from 1994 to 2006 —12 beginner and intermediate level Japanese language textbooks, 8 covering listening comprehension, and 19 for the Japanese Language Proficiency Test or Examination for Japanese University Admission for International Students—and confirmed that the average usage rate for female sentence-final particles in them was between 54.42% and 79.42%, which is between 10 and 15 times higher than actual natural speech. Furthermore, data was obtained from previous experiments (Mizumoto et al. 2007b) that showed that, unless specifically taught otherwise by their instructor, 70% of young students who did the speaking and listening practices in those teaching materials would then try to use the female sentence-final particles just like the conversation examples in their textbooks.

6. Surveying Japanese Language Instructors' Awareness and Analyzing the Data

Between June and July, 2010, I conducted a questionnaire survey of 200 people involved in Japanese language education (118 in Japan and South Korea, 82 in Europe), and then analyzed the results. For details of the survey method, please refer to Mizumoto (2011, 2013a). In the survey, I first checked whether or not the instructor was up to date on the current state of Japanese society, and then tried to discover what sort of awareness and opinions he or she had regarding the problems surrounding gender in textbooks. In the survey, I divided up the statistical data into two groups for analysis, A) Japan and South Korea, and B) Europe². Few differences were observed between the two groups in the majority of categories covering such areas as the image of Japanese women and their work, and the image of Japanese housewives and families³. However, where a startling difference was seen was in the awareness and opinions on female sentence-final particles. In this research, I will perform a comparative analysis of the survey results concerning female sentence-final particles where the differences were conspicuous, and examine the latent gender bias that the results indicate.

In response to a question in the survey regarding whether or not the instructor was aware that female sentence-final particles are no longer being used in natural speech by young women as mentioned above, 91% of instructors in Group A answered that they were aware, whereas in Group B the number was 76%, and of those who answered “not aware”, 85% were women over 50. Judging by their ages and the fact that they had at least 10 years prior experience of living in the Tokyo Metropolitan district, where standard Japanese is spoken (and where female sentence-final particles were mainly used in the past), it is thus fair to assume that since moving overseas they have spent time in an environment where they are unable to notice changes in the speech of younger age groups of women in Japan.

When I then asked the instructors whether or not the textbooks should contrast male and female sentence-final particles, 84% replied that it was necessary. As reasons for this, around one third of the total respondents gave answers such as “The particles are a characteristic of Japanese,” “They are necessary for politeness and in business,” and “I want the differences between male and female speech to be preserved”, and of the remaining two thirds, the majority of opinions given went along the lines of “The particles are used in novels, manga, TV dramas, and movies,” “There are still older people who use them,” “I teach them as an aspect of Japanese knowledge, and it’s important to be able to understand them when you hear them.” From this, it can be seen that most instructors understand the current situation regarding their usage (that older women still use the female sentence-final particles), and that knowledge of them is necessary for understanding literary and film creations. However, with regard to the opinion in the first one third that “they are necessary for politeness, and in business,” one has to question whether a speaker would actually be using female sentence-final particles (which are more commonly used in casual conversations) in a business situation. Moreover, if the instructor “wants the differences between male and female speech to be preserved,” is there not a strong possibility that latent gender-biased thinking is influencing their ideas

about the linguistic roles of men and women?

A difference between Groups A and B was also observed in how instructors felt about the use of female sentence-final particles in speech by young female characters in textbooks, as shown in Table 1 below.

Table 1 Use of female sentence-final particles in speech by young female characters in textbooks

Residence	Approve	Should not be used depending on age and situation,	Should not be used by young people
a. Japan/S.Korea	29%	63%	8%
b. Europe	61%	37%	2%

Around two thirds of the instructors in Group B approved, compared to less than one third of Group A. In contrast, around two thirds of instructors in Group A replied that depending on the speaker's age and/or the situation the particles should not be used, whereas only a little over a third of Group B gave the same response. From these results, it can be seen that Group A instructors, in Japan and South Korea, clearly recognise that the younger age groups of women do not actually use these particles. Among the reasons they gave were, when young women use them, it is "unrealistic and unnatural," "students want to study how Japanese people in the same age group speak," "usage in textbooks should be natural and match real life," "stereotyped women's language in textbooks is a problem that could lead to gender problems," and "there is a concern that this incorrect awareness arising from overuse in textbooks will cause gender problems." It can therefore be surmised that instructors in Japan and Korea are well aware that teaching textbook usage of sentence-final particle that runs contrary to actual use among younger age groups is in itself a gender problem.

On the other hand, even though 76% of Group B instructors in Europe were aware that younger age groups do not use female sentence-final particles, two thirds of them contradictively replied that they approved of their usage in textbooks. Reasons for this were variously given as, "I feel it's odd when women talk the same way as men," "Female students who do not use female sentence-final particles will create a bad impression," "I want these beautiful, soft, feminine words to remain as part of Japanese culture," and "I feel that using these particles is orthodox Japanese." A latent conceptual bias influenced by gender ideology can clearly be identified in these opinions.

4. Thoughts and Conclusions

Based on the results from the survey described above, I was able to confirm the following points.

- 1) Regardless of where they currently reside, most instructors are aware that Japanese women in younger age groups are using female sentence-final particles less and less now.
- 2) Many instructors in Europe approve of the use of female sentence-final particles by young women, and the influence of gender ideology can be recognized in many of those cases.
- 3) The majority of instructors living in Japan and South Korea teach female sentence-final particles as an aspect of Japanese knowledge, and feel that it is necessary to teach them to students so that they can understand them if heard.
- 4) Whatever the case may be, instructors who think that the younger generations should not be actively using female sentence-final particles are demanding natural language usage in textbooks that reflects reality.

New editions of some of the textbooks featured in this survey were published in the middle of the 2000s. However, while topics presented in the later versions were brought up to date, the use of female sentence-final particles by young women characters was still high, ranging from 64% to 74%. Why is it

that, in spite of being language textbooks, they were not updated according to current language usage with attention paid to changes in speech? Do the producers of these textbooks maintain a strongly-rooted perception that female sentence-final particles equal a unique characteristic of Japanese which in turn equals an aspect of Japanese culture that they must preserve? Or does it come from a belief that the middle-aged and older generations are more influential linguistically than younger people? Even if, hypothetically, that were the case in society, is there any reason in textbooks to make young students learn expressions that are already disappearing from actual use?

Included in the replies to the questionnaire was the opinion that the use of female sentence-final particles by young women in textbooks should be tolerated because the books “must present archetypal examples.” It is certainly true that archetypal examples are easy for students to understand and assist comprehension. However, surely gender ideology does not have to be included in that? Should we as teachers continue to pass down traditional stereotypes, and should we also, based on the rather misguided assumption that the age groups which use female sentence-final particles are still the mainstream, ignore linguistic expressions that are changing and continue to change?

If a textbook has to show female sentence-final particles, then it is sufficient for students to recognize them in speech or text and understand their meaning. Showing examples in textbooks in which young characters deliberately use these particles is meaningless, and practice drills that force young students to use them will conversely only end up causing confusion in the learner. It would be appropriate if the use of female sentence-final particles in textbooks is limited to characters in age groups that actually use them, and make students aware that in the fictional world of novels and movies the particles are used to fulfill a particular function.

At the end of the questionnaire I asked the Japanese language instructors whether a Japanese language textbook that paid attention to gender and gender problems was necessary, to which only one person answered that they deemed it unnecessary. Around 65% replied that they thought it was necessary, from which fact we can conclude that now is perhaps a good time for a textbook to be produced in which young female characters do not use female sentence-final particles. As my next research topic, I would like to investigate what sort of expressions young women are actually using in the place of traditional female sentence-final particles, and then put forward a model for a textbook that takes gender problems into consideration.

Footnotes

1. “N” refers to substantives, such as nouns and pronouns
2. For results of the survey of instructors in Group A (Japan and South Korea) regarding female sentence-final particles, please refer to Mizumoto (2011).
3. In the results of the survey covering both Japan/South Korea and Europe, for details of women’s jobs please see Mizumoto (2013a), and for the portrayal of Japanese families see Mizumoto (2013b)

References

- Ogawa, Sayuri (2004). Hanashi-kotoba no danjosa—Teigi, ishiki, jissai [Differences in the spoken language of men and women: Definitions, awareness, and the reality]. *Nihongo to Gender [Japanese and Gender]*, 4, 26-39.
- Ozaki, Yoshimitsu (1997). Josei senyō no bunmatsu keishiki no ima [Current sentence ending forms among women]. In Gendai Nihongo Kenkyūkai [Modern Japanese Research Society] (Ed.), *Josei no kotoba: shokubahen [Women’s language: the workplace]* (pp.33-58). Tokyo: Hitsuji Shōbō.
- Kobayashi, Mieko (1993). Sedai to joseigo – Wakai sedai no kotoba no “Chūseika” ni tsuite [Age groups and female language: the ‘Neutralization’ of words in younger age groups]. *Nihongogaku [Japanese Language Studies]*, 12-6, 181-192.
- Suzuki, Mutsumi (2007). Kotoba no danjosa to Nihongo kyōiku [Differences in men’s and women’s speech and Japanese language education]. *Journal of Japanese Language Teaching*, 134. 48-57.
- Kinoshita Thomson, C. & Iida, S. (2002) Nihongo kyōiku ni okeru seisa no gakushū : Australia no

gakushūsha no ishiki chōsa yori [Studying the differences between the sexes in Japanese language education: from a survey of awareness among Australian students]. *Nihongo kyōiku ronshū: Sekai no Nihongo kyōiku [Japanese-Language Education Overseas]*, 12, 1-20.

- Nakajima, Etsuko (1997). Gimon-hyōgen no gyōsō : [Aspects in interrogative phrases] . In Gendai Nihongo Kenkyūkai [Modern Japanese Research Society] (Ed.), *Josei no kotoba: shokubahen [Women's language: the workplace]* (pp. 59-82). Tokyo: Hitsuji Shobō.
- Mizumoto, Terumi (2006). Terebi dorama to jishshakai ni okeru jousei-bunmatsushi shiyō no zure ni miru gender filter [Teaching feminine sentence-final particles between real society and TV dramas]. *Nihongo Gender Gakkai [The Society for Gender Studies in Japanese]* (Ed.), *Nihongo to Gender [Japanese and Gender]* (pp. 73-94). Tokyo: Hitsuji Shobō.
- Mizumoto, T., Fukumori, S., Takada, K. (2007b). Kaiwa kyōzai ni okeru jousei-bunmatsushi no Atsukai: [Teaching Female Sentence-final Particles in Conversations]. *Proceedings of the Sixth International Symposium on Oral Proficiency Interview*, 85-90.
- Mizumoto, T., Fukumori, S., Takada, K. (2009). Nihongo kyōzai ni miru jousei-bunmatsushi: Jishshakai ni okeru shiyōjittai chōsa to no hikaku bunseki [Comparative Analysis of Female Sentence-final Particles in Japanese Textbooks with Usage in Real Society]. *Journal of the Society for Gender Studies in Japanese*, 4, 12-24.
- Mizumoto, Terumi (2011) . Nihongo kyōshi no ishiki chōsa bunseki: Nihongo kyōkasho ni okeru jousei-bunmatsushi shiyō ni kanshite [An analysis of Japanese language teacher's consciousness of female sentence-final particle usage in Japanese textbooks]. *Bulletin of the Center for Fundamental Education*, 9, 55-80.
- Mizumoto, Terumi (2013a). Nihongo kyōkasho ni okeru jousei no shokugyō: Kyōkasho bunseki to Nihongo kyōshi no ishiki chōsa [Women's occupations in Japanese language textbooks: A Comparative analysis of textbooks and teachers' gender consciousness]. *Bulletin of the Center for Fundamental Education*, 16, 19-44.
- Mizumoto, Terumi (2013b). Nihongo kyōkasho ni okeru gender: Kyōkasho no Nihon jousei-zō wa gendai shakai no jittai wo tsutaete iru ka [Gender in Japanese language textbooks: Do the images of Japanese women appropriately represent the realities of modern society?]. *Language and Conceptual World View*, No.45. *National Taras Shevchenko University of Kiev*, 153-159.
- Kawasaki, K. & McDougall, K. (2003). Implications representations of casual conversation: A Case study in gender-associated sentence final particles. *Nihongo kyōiku ronshū: Sekai no Nihongo Kyōiku [Japanese-Language Education Overseas]*, 13, 41-55.

Note: As for the list of the investigated textbooks, please refer to the chart that is indicated on the last page of the Japanese paper.

(日本語訳)

日本語教科書におけるジェンダー：現代社会の実情と教える側の認識

水本光美

キーワード：日本語教科書、女性文末詞、日本語教師、ジェンダー・イデオロギー

1. はじめに

日本語学習者にとって、教科書は言語を習得するためだけではなく、日本社会や日本文化を知る上でも重要な役割を果たす。特に、日本社会での実体験がない海外における学習者にとっては、教科書に描かれる日本人像や日本社会像がそのまま現在の日本の姿であると受け取られる可能性が高い。現在、日本語教育において広範に使用されている教科書の多くには、従来のジェンダー・イデオロギー的な観念に影響を受けた描写が認められる。例えば、現在は実社会で普通体によるくだけた会話において、従来の“女性文末詞”が既に消滅しているにも拘わらず、多くの日本語教科書の中の若い女性登場人物に今もなお使用され続けているという「不自然な言語使用」が長年改善されずに引き継がれている。

このような教科書を現場で扱う日本語教育者が教科書の中のジェンダーをどのように認識し教えているのか、それを把握するために、日本語教育に携わる人々計 200 名へアンケート調査を実施した。その調査により、日本国内及び韓国在住者の回答結果と欧州在住者の回答結果に顕著な差異が認められたのが「女性文末詞の使用状況」である。本研究では、水本他 (2009) による「女性文末詞」に関

する教科書研究結果を日本語教師がどのように捉え、かつ、教育現場で女性文末詞をどのように教えているのかを探る。さらに、教科書がなぜ、ことばの変化に関して反応が穏やかであるのかについて考察し、今後の教科書への提案を試みるものである。

2. 先行研究：日本語教科書と自然会話の比較分析

日本語教科書における女性文末詞の研究は90年代には主だった研究がなされた。「～わ」「～かしら」などの女性文末詞は、先行研究（小林1993、尾崎1997、中島1997、小川2004など）によって衰退傾向にあると報告されている。それらの自然会話のデータは収集時期が90年代前半から半ば頃であり、10年を経過すると世代も変わるため、水本（2006）では2004年から2006年にかけて新たに独自のデータ収集を実施した。（調査方法は先行研究を参照）

先行研究（水本2006）における女性文末詞は、現在は20代から30代の若い世代の女性の普通体によるくだけた会話からは殆ど消滅したと認められた主に4種の文末詞、即ち、「～わ（よ／ね）」「～かしら」「体言+ね／よ」「～のよ」に調査対象を絞った。その上で、水本他（2009）においては、20代から40代の計36名の女性標準語話者のデータを集計した結果、その3世代の女性文末詞使用率平均値は、わずか5.26%であり、取り分け20代は2.36%と微量であることが確認出来た。まったく使用しないのも7名見られた。僅かに使用される場合も、「普段は使用しないが、冗談や年配女性の発話の引用や皮肉などで意図的に使用される」ということが、会話収集した女性達に対して実施したアンケート調査で明らかになった。

一方、大半の教科書の中に扱われる女性文末詞研究は少なく、筆者以前の研究としては、KAWASAKI & MCDUGALL(2003)のものが明確な独自データによる唯一の研究である。その他、鈴木（2007）やトムソン・飯田（2002）らも女性文末詞の衰退傾向が日本語教育に反映されていない点を指摘したが、それらの分析対象数もデータ数も充分ではない。

そこで、水本他（2009）では、1994年から2006年の間に出版された初中級日本語教科書12種、聴解教材8種、日本語能力試験および日本留学試験19種、合計39種を調査したところ、その平均使用率は54.42%から79.42%と、自然会話の約10倍から15倍と高いということが確認出来た。また、そのような教科書の会話を聴き発話練習をした若い学習者は、教師が女性文末詞についてとりわけ説明をしなければ、70%が女性文末詞を教科書の会話例の通り使用しようとする実験結果も、それ以前の研究、水本他(2007b)で明らかになっている。

3. 日本語教育者への意識調査と結果分析

2010年6月から7月にかけて、日本国内、韓国、欧州に在住する日本語教育関係者総数200名（日本国内+韓国：118名、欧州：82名）に対してアンケート調査を実施し、その結果を分析した。調査方法に関しては水本（2011,2013a）を参照されたい。この調査では、まず、教育者が日本社会の現状を把握しているかどうかを確認し、教科書におけるジェンダーに関する問題点に対して、教育者がどのような認識を持ちどう考えるかを知ることが目的とした。この調査では、a.日本国内と韓国、b.欧州に分けて統計をとり分析した²が、日本女性像や女性の職業、主婦像、および家族像など³、大方の項目において、この二つのグループに、さほど大きな差異は認められなかった。しかし、その中で特徴的な差異が認められたものが、女性文末詞に対する認識と考えであった。本研究においては、その差異が顕著であった女性文末詞に関する調査結果の比較分析をし、潜在するジェンダー・バイアスを考察する。

前項で述べた現在の若い女性による自然会話において、「女性文末詞非使用」という実態を認識しているかどうか」という日本語教師に対するアンケート調査結果では、a.は、「知っている」が91%であったのに対し、b.では76%であり、「知らなかった」と回答した人のうちの85%が50代以上の女性であ

った。彼らの75%が以前10年以上標準語圏である首都圏に在住したことがあることや彼らの年齢から推測すると、この分類に属する女性教師たちは、海外に移って以来は、日本国内の若い世代の女性達のことばの変化に気づかない環境にいたと見受けられる。

次に、教師たちに「男女の文末形式を対比的に教科書で紹介すること」の是非、を聞いてみたところ、84%が必要であると答えた。その理由としては、「日本語の特徴である」「ポライトネスやビジネスでは必要」「日本語の男女のことばの違いは残したい」などと考える人は全体の約3分の1であり、残りの3分の2は「小説・マンガ・ドラマ・映画などで使用されている」「今も使用している年代もある」「知識として教え、聞いて理解出来ることが肝要」などの意見が大半を占めた。これにより、大半が現状（年配者は今なお使用している）を把握しており、女性文末詞が使用される創作物の理解には必要であると考えていることが分かる。ただ、3分の1の中の「ポライトネスやビジネスでは必要」に関しては、果たしてその場合、普通体を使用するだけで話し方をするだろうか、という疑問が残る。また、「日本語の男女のことばの違いは残したい」と考える場合、そこに、言語による男女の役割分担的なジェンダー・バイアス的な考え方による影響が潜在している可能性はないであろうか。

さらに、「若い世代の女性登場人物の発話に女性文末詞が使用されていること」に関し、教師達がどのように考えるかという回答結果にも、次の表1のように、aとbの差が顕著に見られた。

表1 若い世代の女性登場人物の発話に女性文末詞が使用されていること

在住地	良いと思う	年代と場面により使うべきではない	若い世代は使うべきではない
a.日本国内・韓国	29%	63%	8%
b.欧州	61%	37%	2%

b.の約3分の2が「良いと思う」と答えたのに対し、a.では3分の1にも満たない。対照的に、「年代と場面により使うべきではない」と答えたのは、a.が約3分の2でb.が約3分の1余りである。この結果から、a.の国内と韓国在住の教師たちは、「若い世代の女性は現実には使用しない」ことを明確に認識し、若い世代の女性が使用すると、「現実とかけ離れて不自然」「同世代日本人の話し方を学習することを本人達が望んでいる」「実情に合わせた自然な使い方をすべき」「女性だからとステレオタイプの使い方は問題」「過度な使用により誤った認識、ジェンダーに反映する恐れあり」など、若い世代の現状に反した使い方を教科書で指導することはジェンダー問題である、との認識が高いことが推察出来る。

一方、b.の欧州在住の教師たちは、76%が若い世代の非使用を認識しているにも拘わらず、3分の2が「良いと思う」と回答する矛盾が生じている。「良い」と考える理由としては、「女性が男性と同じ話し方だと変に感じる」「女性文末詞を使用しない女性学習者が悪い印象を持たれる」「美しく柔かい女性らしいことばを日本文化として残したい」「その方が正統な日本語という感じがする」などが挙げられた。これらの考え方には、明らかに、ジェンダー・イデオロギーに影響されたバイアスの観念が潜在していることが見てとれる。

4. 考察とまとめ

以上の調査結果より次のことが確認できた。

- (1) 現在の若い世代の女性が女性文末詞を使用しなくなっているという現状は、在住国に拘わらず、大方が認識している。
- (2) 欧州在住者の多くが若い世代の女性の女性文末詞使用を「よし」としており、そこには少なからず、ジェンダー・イデオロギーの影響が認められる。
- (3) 日本と韓国在住者の大半は、女性文末詞は知識として教え、聞いて理解出来るように教育する必

要があると考えている。

- (4) いずれにせよ、若い世代が積極的に使用するべきではない、と考える教師は、より現状に即した自然な言語使用を求めている。

調査対象とした教科書の中には、2000年代半ば頃に改訂版が発行されている。しかし、その改訂版で扱うトピックなどが現代風に更新されてはいても、若い世代の女性文末詞の使用率は64%から74%と未だに高い。言語の教科書でありながら、言語における変化が注視されず現状に即して更新されないのはなぜであろうか。教科書制作者は、まだ根強く「女性文末詞＝日本語の特徴＝継承すべき日本文化」という意識を持ち続けているのであろうか。或いは、「若い世代より中年以降の世代のほうが主体」という認識によるのであろうか。仮に社会的にはそうであったとしても、現実的にすでに消滅してしまっている表現を言語の教科書のなかで若い世代の学習者に取って代わらせる意義があるのだろうか。

アンケートの中で「教科書は典型を提示する必要がある」ために若い女性による女性文末詞の使用を容認するという意見もあった。確かに典型は学習者にとって分かりやすく理解の助けになる。しかし、その中にジェンダー・イデオロギーが含まれてはいないだろうか。私たち教師は、従来の典型を伝え続け、また、現状はいまだ女性文末詞を使用する年代が主流であるとの認識にたつて、すでに変化し今後も変化を続ける若い世代のことばを無視していいのだろうか。

教科書で女性文末詞を提示するとしたら、上記(3)のように、聞いたり読んだりしてそれが認識でき意味が分かるようになれば、充分である。わざわざ、若い登場人物に使わせる例を提示することは無意味であるし、若い学習者に取って代わらせるような練習もかえって学習者の混乱を招くだけである。教科書の中の女性文末詞は、現実にもそれを頻繁に使用している年代に限定するのが適切であり、小説や映画などの仮想世界では、一種の役割語として使用されていることを認識させるべきであろう。

教師へのアンケートの最後に「ジェンダー（問題）に配慮した日本語教科書は必要か」という質問に対して、「必要ではない」と回答したのは、僅か1名であり、約65%が「必要だ」と回答したことからも、少なくとも、若い世代の女性登場人物が女性文末詞を使用しない教科書が出現しても良い時期だと考えられる。今後は、女性文末詞を使用せず、どのような表現を若者たちが実際に用いているのか調査し、ジェンダー問題に配慮した教科書の具体案の提示を研究課題としたい。

注

1. 「体言」とは、自立語で活用を有せず文の主語となり得るもの。名詞、代名詞、数詞。
2. 女性文末詞に関する a. の日本国内と韓国の調査結果は水本（2011）を参照されたい。
3. 「日本国内と韓国」と「欧州」を合わせた調査結果のうち、女性の職業に関しては水本（2013a）をまた、日本の家族像に関しては水本（2013b）を参照されたい。

[参考文献]

- 小川早百合（2004）「話し言葉の男女差－定義・意識・実際－」『日本語とジェンダー』vol.4, 日本語ジェンダー学会, pp.26-39.
- 尾崎喜光（1997）「女性専用の文末形式のいま」『女性の言葉・職場編』, 現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp.33-58.
- 小林美恵子（1993）「世代と女性語－若い世代の言葉の『中性化』について」『日本語学』12-6, pp.181-192.
- 鈴木睦（2007）「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134号, 日本語教育学会, pp.48-57.
- トムソン木下千尋・飯田純子（2002）「日本語教育における性差の学習：オーストラリアの学習者の意識調査より」『日本語教育論集 世界の日本語教育』12, 国際交流基金日本語国際センター, pp.1-20.
- 中島悦子（1997）「疑問表現の様相」現代日本語研究会編『女性の言葉・職場編』, ひつじ書房,

pp.59-82.

- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末使用のずれにみるジェンダーフィルター」『日本語とジェンダー』, ひつじ書房, pp.73-94.
- 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2007b) 「会話指導における女性文末詞の扱い」『第 6 回 OPI 国際シンポジウム論文集』, 第 6 回 OPI 国際シンポジウム, pp.85-90.
- 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞 —実社会における使用実態調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』第 9 号, 日本語ジェンダー学会, pp.12-24.
- 水本光美 (2011) 「日本語教師の意識調査分析-日本語教科書における女性文末詞使用に関して-」『基盤教育センター紀要』第 9 号, 北九州市立大学, pp.55-80.
- 水本光美 (2013a) 「日本語教科書における女性の職業:教科書分析と日本語教師の意識調査分析」『基盤教育センター紀要』第 16 号, 北九州市立大学, pp.19-44.
- 水本光美 (2013b) 「日本語教科書におけるジェンダー:教科書の日本女性像は現代社会の実態を伝えているか」『Language and Conceptual World View』No.45, タラス・シェフチャンゴ記念キエフ国立大学, pp.153-159.
- KAWASAKI, Kyoko & MCDUGALL, Kirsty. (2003) Implications Representations of Casual Conversation: A Case Study in Gender-Associated Sentence Final Particles. 『日本語教育論集 世界の日本語教育』13, 国際交流基金日本語国際センター, pp.41-55.

[参考資料]

調査対象日本語教科書一覧

		書名	出版年	出版社
日本語教科書	初級	Situational Functional Japanese: Model	1994	凡人社
		Total Japanese: Conversation 2	1994	早稲田大学
		みんなの日本語	1998	スリーエーネットワーク
		げんきⅡ	1999	The Japan Times
		文化初級Ⅱ	2000 改訂	凡人社
	中級	中級の日本語	1994	The Japan Times
		ニューアプローチ 中級日本語（基礎編）	2002	日本語研究社
		J Bridge	2002	凡人社
		なめらか日本語	2005 改訂	アルク
		まんがで学ぶ日本語会話術	2006	アルク
		会話の日本語	2007 改訂	The Japan Times
中上級	ニューアプローチ 中上級日本語（完成編）	2002	日本語研究社	
聴解副教材	初級	毎日の聞き取り 50日（下）	1998	凡人社
		楽しく聞こう	2000 改訂	文化外国語専門学校
		聴解が弱いあなたへ	2000	凡人社
		Total Japanese Conversation2 問題集	2000	早稲田大学
		みんなの日本語Ⅱ 聴解タスク25	2005	スリーエーネットワーク
	中級	テーマ別日本語（ワークブック聴解）	2004 改訂	研究社
		日本語生中継（中上級）	2004	くろしお出版
		日本語生中継（初中級1）	2006	くろしお出版
試験	能試	平成15年度～19年度：日本語能力試験問題と正解（1級2級）	2004-2008	凡人社
	留試	日本留学試験 試験問題：16年度～19年度（第1回、第2回）20年度（第1回）	2004-2008	桐原書店

（みずもと てるみ・北九州市立大学教授）

【研究例会 IN ハンガリー発表】

教科書作成におけるジェンダーバイアス

The Gender Issue in Textbook Design

Noriko Sato

Anna Székács

The users (learners) of business Japanese language textbooks would expect to increase knowledge about the Japanese language, culture and society, master the Japanese manner, and develop the communication skills with the Japanese business people through the textbooks. In today's Japanese society we can find so many gender biased language uses, words, sentences, manners and etiquettes, behaviours of working persons in workplaces, which are traditional and conventional, in other words, almost everyone applies. This presentation tries to show the business Japanese textbook designers' and authors' dilemma of whether to (or how far we should) teach the present situations and conventions in Japan in order to communicate easily with Japanese people or to (or how far we should) show the possibilities and potentialities of gender free language uses, manners and behaviours applying in textbooks. We examine how to handle these sensitive issues from the approaches of the crosscultural understanding, that is, the contrast and the dialogue between the past and the present in Japan and Hungary or the learners' communities, and discussions among learners and teachers, which would develop the learners' critical cultural awareness.

Since the 1990's, in the Japanese Department of Budapest Business School we have published more than 10 kinds of Japanese language textbooks, dictionaries and teaching materials. In 2006 we scrutinized the business Japanese textbook used at that time in our institution from the viewpoints of gender. Then we found a number of problems.

In 2007 we launched a new project, supported by the Japan Foundation, to write a Japanese textbook for beginners titled *DEKIRU*, which means We Can, based on the CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) with other Japanese and Hungarian colleagues.

This was a sort of international teamwork. During the project we tried to make use of our experiences of this study which dealt with gender in textbooks. However, it was a pity that we were confronted with various difficulties concerning gender issues on which we already held a presentation at the last meeting of the society of the Japanese Language and Gender held at Budapest Business School in 2011. After *DEKIRU 1* and *DEKIRU 2* were successfully published in 2012, dr. Székács Anna and I started a new project, which was writing a business Japanese textbook, the *BUSINESS DEKIRU*.

In designing the new textbook we would like to check the crucial issues of gender which could appear in various business situations of the textbook not to fall into a trap of gender. But before discussing the gender issues in a business Japanese textbook, first we have to clarify why there is a special need for a business Japanese textbook.

First, no such Japanese language textbooks exist for Hungarian learners in Hungary. Secondly the economic relations between Japan and Hungary have been dynamically developing since the 1990's and more and more Hungarian people started to work at companies which have connections to Japan and to work with Japanese people in Hungary. Furthermore, many Hungarians, including our

graduates, are also working in Japan because the Japanese companies have realized the significances of diversity. As a result, employing people of different nationalities is now part of their international business strategy. Therefore, they began to employ foreign people, though their number is still limited. Subsequently, the needs for business Japanese textbooks, which show how to communicate with Japanese businesspersons or workers, are increasing. In other words, the users (learners) of business Japanese language textbooks would desire to acquire knowledge about the Japanese language, culture and society, master the Japanese manner, and develop communication skills with Japanese business people through textbooks. But in today's Japanese society we can find so many gender biased language uses, words, sentences, manners and etiquettes, as well as behaviors of working persons in workplaces, which are traditional and conventional in Japan.

Here we have been confronted with the dilemma about the role of textbook, whether to (or how much we should) teach the present situations and conventions in Japan in order to communicate easily with Japanese people, or whether to (or how far we should) show the possibilities and potentials of gender free language uses, manners and behaviors applying in textbooks.

Anyway we have to design a textbook which provides not only the knowledge and skills of verbal and non-verbal communication to communicate with the Japanese businesspeople but also knowledge like the Japanese business customs, practices, social conventions, etiquettes and the Japanese way of thinking or Japanese patterns and characteristics of behaviors, taking account of the perspective of gender or the gender sensitive authors' dilemma.

Now we show you the outline of our new business textbook, the *BUSINESS DEKIRU*: The level of this textbook is B2 to C1 which is upper intermediate business Japanese. The languages used are both Japanese and Hungarian. The large parts of explanations would be written in Hungarian. In the first part of each lessons we put the can-do statements learned there: for instance, which communication strategy can be used in certain situations and why.

As I have mentioned earlier, in today's Japanese society we find many gender biased language uses and situations. Should the language textbook reflect the current language use and situations which are strongly gender biased? Or should we show the possibilities and potentials of gender free language use, manners and behaviors in the textbook? Will the gender sensitive teachers approve our textbook design reflecting the ideal situations and language uses?

For instance, before working out the structure of the textbook, we have to create the characters appearing in the different scenes in the textbook, and decide where the stories will take place, in Japan, in Hungary, in a Japanese company or at a Hungarian company. Who should be the main character/characters, should it be a woman or man, what should their age be, should they be a Hungarian or Japanese?

At the same time it is very dangerous to show the situations and language uses we think of as ideal in the textbook because in actual situations, learners may not be able to use such communicational strategies, words or expressions they have learned in textbook. So we have to take care of such troublesome situations. We have to avoid making textbook which is useless.

So we chose a Hungarian woman and a man as the main characters. The Hungarian young lady found a job in a branch office of German company in Japan, where most of her colleagues are Japanese men and her boss is also a Japanese man, whereas only the director of the branch is German. The other main character is a Hungarian man working at a Japanese company in Hungary.

After every third lesson we show Japanese business customs and etiquettes, including how to

negotiate with the Japanese people. These items are difficult for Hungarian people to understand. This part is written both in Japanese and in Hungarian. We apply the functional syllabus to the textbook.

Language functions of each lesson we selected are: request, permission, expressing oneself, giving dissenting opinion, making a complaint, handling a complaint, making an appointment with, reserving a ticket of concert, room of hotel, table at restaurant, organizing the business programs for partners, planning and organizing events in a company, introducing profiles of one's own company, sales for own products, writing messages, and writing e-mail.

After every 3 lessons we also have texts about the history of cultural, economic relations between Japan and Hungary. We have vocabulary lists in the last part of the textbook.

We would like to teach the actual Japanese business custom and etiquette in the new textbook. They are rules and ways of Japanese behaviors — greeting, exchange of name cards, self introduction, and etiquette at business negotiations, proceedings of meeting, requested and desired Japanese behavior, dress code, available clothes, meanings of various colors, uniform, table manners, orders of sitting at table, exchange of gifts, etc.

In 2006 when we scrutinized different business textbooks which we had used until then, we found stereotypes of characters appearing in the Japanese textbooks. We found that the president and the bosses are always men, and staffs, secretaries or subordinates are always young ladies. Now we should ask questions: In our textbook should we choose the woman as the president in order to be sensitive to stereotypes of gender?

In our earlier project of editing *DEKIRU 1* and *DEKIRU 2*, much effort was made in order to avoid gender biased words, expressions and situations. Some of our efforts were successful, but some efforts have failed. Which items were unsuccessful?

First we couldn't find any pictures of girls or women playing Japanese traditional sports. All players in the pictures we found were boys or men. We also found that some illustrations were problematic. One example is in connection with characters. In one lesson the editors decided that the writer of a letter should be a female teacher, but when this letter was translated, the translator, who was a young Hungarian, decided for himself or maybe he believed that all teachers were men, therefore a man voiced the teacher on the CDs. Because of this we had to change the name of the writer. Also we often found that women voiced shop clerks and nurses. The reason to this is that some members of the editing team were not gender sensitive and I often drew attention on this issue for them but in vein. I couldn't check all gender sensitive crucial points. Another reason is that the CD recording was made in Japan and no one could check the issue during the recording of the CD except one young Japanese teacher.

There are 5 gender sensitive points in making a textbook. First issue is the balance of the gender of the characters. The second one is the balance of genders of vocations for the characters. The third one is using or avoiding gender biased words. For example, should we teach women's language and men's language or not? The fourth one is the balance of numbers of illustrations of characters. The fifth one is how to show Japanese business customs and etiquettes. Should we teach the present situations or situations and teach what should be expected in future?

The first issue is the balance of the gender of the characters. Which gender should the boss be? How should the genders of the colleagues be ballanced? What relevant situations can we find at Japanese companies today? We know that in this field we can find some changes in Japan. At the same time we also have to decide the balance of genders within the Hungarian company.

The second issue is the balance of genders in terms of the vocation of characters.

What gender should a secretary and an assistant be? In the business negotiations should we put women members in the delegations? In Hungary it is a normal situation when woman negotiators play active role in the negotiation. How old should the boss and subordinates be?

In Hungary it is also normal when the bosses are in their 30's and subordinates in 50's.

The third issue is using or avoiding gender biased words. Should we teach the women's language and the men's language or not? Should the words, businessman or businesswoman or businessperson, be applied or avoided? Or man who is earning salary, 'salaryman' or employee 会社員 in Japanese? Can we use the 'Office Lady' or 'OL' in Japanese or we shouldn't use them? Could we show the role of tea service in the office, お茶汲み in Japanese, who is always a woman employee? Or can we create and use absolutely new words and expressions in the textbook, because we would like to avoid the gender biased words? These are the questions.

The fifth is how to show the Japanese business customs and etiquettes. Should we teach the current situations? In Hungary and in Japan we have different dress codes. In Hungary women can wear the sexy suits, mini skirt, tight white trousers, especially décolletage. In the Japanese business situations people, not only women but men should be dressed in a mannerly fashion. The colors of business suits are gray or dark blue.

The users (learners) of a textbook must like to use skills and knowledge they learned in the textbook in the real situations in order to communicate with the current Japanese people. Before we started writing the textbook, we had to take account of the appropriateness and availability of words and expressions, situations and balance of the genders of the characters. So in order to make the communication easy and smooth, we have to show the current situations. However, at the same time, we also like to avoid agreeing with the current situation, which are gender biased. It is not easy to keep the balance between them.

It may be important that we have to approach the sensitive issues from a cross-cultural viewpoint; that is, the contrast and the dialogue between the past and the present in Japan and Hungary or the learners' communities, and discussions among learners and teachers, which would develop the learners' critical thinking or critical cultural awareness.

References:

Sato N., and Székács, A. 2007. "Politikailag korrekt nyelvhasználat az európai japán nyelvoktatásban és a távol-kelet térségi kutatásban," In: Farkas, I. ed., *Japanisztika 2005-2006*. Budapest. 149-160.

Sato N., and Székács, A. 2012. "Problems of Gender in Editing a Textbook of Japanese Language."

Nihongo to Jendā. vol. 12:<http://www.gender.jp/journal/no12/08-04-sato%20and%20Szekacs.html>

ブダペスト商科大学の日本語科では 1990 年代から教科書、教材作成が行われており、10 種類以上が出版されている。2006 年に従来商科大学で使用してきたビジネス日本語の教科書をジェンダーの視点から調査してみた (Sato, Szekacs 2007)。2007 年にその知見をも参考にしつつ、初級日本語教科書『できる 1』のプロジェクトに取り掛かった。しかし、本プロジェクトを進める中で、改めてジェンダーに関わる様々な問題が発生した。これについては 2011 年のジェンダー学会で発表した (Sato, Székács 2012)。

2012 年に初級日本語教科書『できる 2』も出版に漕ぎ着けた後、本稿執筆者 2 名は、新たな教

科書『ビジネスできる』の作成プロジェクトにとりかかった。執筆に当たっては、ジェンダーの落とし穴を避けるため、『できる 1』『できる 2』の経験を参考に様々な観点からジェンダーに関わる問題を検討する予定である。

新しい教材の企画。本教材の必要性：ハンガリーにおいて、これまで社会人向けビジネス日本語教材は作られていない。日本とハンガリー間の経済交流が拡大し、ハンガリーに進出した日系企業で働くハンガリー人だけでなく、企業の国際戦略として外国人採用枠を増やす日本の企業で働くハンガリー人のためにも、日本のビジネス習慣やエチケット、ビジネスに必要な日本語を教える必要性が高まっている。

教科書の役割。教科書の使用者（学習者）は、教科書を通じて日本語、日本社会についての知識を増やし、日本のマナーを習得し、異文化理解を深め、コミュニケーションを円滑にできるようにしたいと考えている。ジェンダーの視点から見た日本社会は、性差に満ちているが、教科書はそのような今の日本社会を映すべきであろうか。それとも、ジェンダーの面で教師が理想とする状況を映した教科書を作るべきであろうか。具体例を示そう。『ビジネスできる』の主役、登場人物は男性がいいのか女性がいいのか。ステレオタイプになるべきではないが、現在の典型的な日本社会を反映しない例外的な状況を示すことは、実際の場面では使用できない教科書になってしまう恐れがある。「ビジネスマン」「ビジネスウーマン」「ビジネスパーソン」のうち、どれを使用するのが望ましいのか。あるいは、教科書執筆者がジェンダーバイアスのかからない新しい語彙を創作すべきなのであるか。教科書使用者（学習者）は教科書で学習したものを実際の場面、現代日本社会で使いたいと考えているはずである。教科書執筆に入る前に、どの表現が最も使いやすいのか、最も妥当な語彙、表現、ジェンダーバイアスのかからない場面、状況、登場人物などの使用ストラテジーを考えなければならない。また、日本のエチケットやマナーを紹介する際にも、現状肯定主義となり、ひいてはジェンダーバイアスを助長することにつながりかねない現状紹介という立場とジェンダーの視点を盛り込むという立場との間でどのように（どの程度）バランスを取るのか考える必要がある。

異文化理解は、言語行動、コミュニケーション能力、ポリティカル・コレクトネス（ジェンダーを含む）の意識の面から育成しなければならない。

（さとう のりこ・ブダペスト商科大学 准教授）
（セーカーチ アンナ・ブダペスト商科大学 教授）

Gender Consciousness in Natsume Sōseki

Kayoko Takagi

This presentation aims to explain how in the context of Meiji society Natsume Sōseki developed his consciousness about the gender issues throughout his works. His approach to the female figure starts from the romantic dreamlike image, putting it as something inevitable, yet distant to the man. Some works from his early period show a clear demureness towards women, but this perception changes gradually towards a recognition of the female role in men's life as a companion, friend and even as a counterpart of a taut relationship between man and woman. We can trace this development by reading his major works. At the same time he was critically aware of the European feminist movement; which soon after found itself on Japanese soil.

Sōseki as an enlightened writer

Natsume Sōseki is one of the most important and influential writers at the dawn of the modern Japanese literature in the Meiji era (1868-1912). His works have been intensely and widely studied, both inside and outside Japan. For his time, Sōseki along with Mori Ōgai, was an enlightened intellectual when Japan started to assimilate Western civilization, despite all the troubles that entailed. His popularity in Japan surpasses other writers of the past and makes him appear as a favorite writer for many contemporary writers, such as Murakami Haruki¹. On my part, I can confess that, as a young student of Junior High School, I started to read Japanese literature thanks to his works, such as *Botchan* or *Sanshiro*.

One of the reasons of this phenomenon is, most probably, his experience to be, first, an English teacher in several high schools and, later, a professor at Tokyo University. Although he neglects repeatedly the tedious days he spent in Matsuyama or Kumamoto, where he taught English language and literature, or his duty as the successor of Lafcadio Hearn at the University, he had a number of important young followers coming every week to his home to meet him. We can mention, for example, 芥川龍之介 Akutagawa Ryunosuke or 和辻哲郎 Watsuji Tetsurō, two of the most relevant intellectuals in the Taisho era, who received his direct influence. The world described by Sōseki has something akin and attractive to young readers of different generations. In other words, he communicates well with the young over time.

¹ Murakami told this remark during his participation in the talk show for the literary awards created to commemorate late 河合隼雄 Kawai Hayao, Murakami's best friend and an important authority of clinical psychology.
(<http://www.sponichi.co.jp/society/news/2013/05/07/kiji/K20130507005752400.html>, consulted date: 24/9/2013)

Early image of the woman and the general status of women in the Meiji era

When one reads *我輩は猫である Wagahai wa nekodearu, (I am a Cat)*, his very first novel so well received by the general public, one discovers a rather ordinary life of an intellectual described and scrutinized by his pet, the cat. It seems that in his works in this period, including his following novel *坊ちゃん Botchan*, he was not so much aware of the role of women in society. He acts rather like a gentleman who dominates his family, but, at the same time, depends on the service of his wife and his maid. The novel is presented as a global parody of his surroundings, and all the characters men and women, including himself, are ridiculed to provoke laughter. Nevertheless, the way of describing the wife of Kushami-sensei is that typical stereotype of a male who looks down on his wife because of the low education she had received and her general status in such system called 家制度 *Ie-seido* (Japanese Family System), established in Meiji era.

In this system the head of each household should be a man and his successor also should be a boy, the eldest son of the family. Therefore, the system has a patriarchal character and served to maintain the male-centered order of the society. For this reason, it will be useful that we trace back the gender issues raised during Meiji era in order to grasp roughly the general women's situation.

The expression for the ideals of the female at that time is 良妻賢母 (*Rhōsai-kenbo*), literally, good wife and wise mother. The idea was inherited from the education given to the girls during the former period of Edo through 女大学 (*On'na Daigaku*)². According to it, women must obey the orders of her parents and husband without exception, and their behavior must be humble and diligent at every moment.

During the Meiji period, Japan experienced two major international wars, the Sino-Japanese war (1894-5) and the Russo-Japanese war (1904-5). In this context, what was expected from the women was to give birth to many male babies and raise them in sound health to serve the country's progress. They were deprived from the right of succession and, until 1872, the fifth year of Meiji, men could hold as many concubines as they wanted or could afford.

The best-known feminist activist of this time, who claimed the rights for women, was 平塚雷鳥 *Hiratsuka Raichō* (1888-1971). In 1911 she founded the first literary magazine entirely run by women called 青鞥 *Seitō* (Bluestocking) and contributed to the feminist movement in modern Japan through the New Women's Association.

Raichō at the age of 20 years fled with *Morita Sōhei* (1881-1949), a married man, one of the most enthusiastic disciples of *Sōseki* at that time. They attempted love suicide. This scandal ended to turn into the fiction work written by *Morita*. The novel *煤煙 Baien* was endorsed by *Sōseki* to be published in *Asahi Shimbun*. *Morita* was compelled to write something about this incident that must be considered his misbehavior from his master's point of view. On the other hand, *Sōseki's* stance towards the couple was rather neutral; he showed good understanding on *Raichō's* brave determination to act as *Morita's* counterpart of the affair. He did not take a moralistic position driven by the social conventions during the time. In this respect, it is interesting to see the account of *Sasaki Hideaki* who argues that *Raichō* could be the model of *Mineko*, the heroine of *Gubijinsō* and a new

² A book for girls' education in Edo period based on Confucius philosophy by 貝原益軒 *Kaibara Ekiken* (1630-1714) published in 1716.

woman of the era.³ This episode shows well enough that Sōseki was aware and interested in the sprout of feminist movement that was being oppressed in many ways in Meiji society.

Female roles in 三四郎 *Sanshirō*, それから *And Then*, and 門 *The Gate*

As Sōseki progresses towards serious creation of modern novels, we start to notice the change in his attitude regarding his way of dealing with female characters. The phrase repeated by Mineko in *Sanshirō*, “The stray sheep,” expresses symbolically Sanshirō’s state of mind, in particular about Mineko, the desired counterpart with sexual and spiritual attraction but in full enigma for Sanshirō. The description of the scene — Sanshirō saw her for the first time from far away — shows the distance, the wonder, the curiosity and the yearning of a female. This image overlaps that of Tsubouchi Shōyō, who declared in his criticism 小説神髓 *Shōsetsu Shinzui* (*The Essence of the Novel*) that the heart of arts must be love and suffering.

The second of the series is *それから And Then*. Here, the yearning object is married to a friend and we find the man with the determination to keep his love despite the possible disinheritance from his father. The woman figure plays, after all, a passive part of the story and lacks individuality. Her destiny depends totally on the man’s choice. We observe a clear contrast between Daisuke’s delirium to break up the old ethic ties and the sad static attitude of Michiyo.

The last novel *門 The Gate*, deals with the couple who seems to be abandoned by the society after having been responsible for the incident of *And then*. The wife is the accomplice of the crime they had committed and their shadowy and hidden life is a course of redemption to the society. However, Sōsuke, the main character, wonders if he could find his escape in Zen Buddhism. His attitude can be scrutinized in the sense that he only thinks of his salvation ignoring the existence of his companion Oyone. It seems he cannot, or does not want, to find any possibility to seek another solution to their common struggle counting on his wife’s participation in the problem.

こころ *Kokoro*, 行人 *The Wayfarer*, and 道草 *Grass on the Wayside*

This attitude of the male character continues in the following works, such as *行人 The Wayfarer* and *こころ Kokoro*. We can see a woman as a direct cause of the hero’s inner anguish and trouble, yet he roughly misses the psychological descriptions of the heroin. She is regarded by the hero as an unreachable or distant existence despite their kinship as his wife.

In *行人 The Wayfarer*, the wife of the hero is described as a cold and almost heartless person. Probably this perception of the hero pushes him to suspect of her having an affair with his brother, although, in the bottom of his heart, he is longing for her warmth and care for him. His spiritual distress cannot find the comfort in her and he plunges into a desperate self-destroying situation. After all, the female figure hidden behind the male character holds the secret of his longings.

For many fans of Soseki *こころ Kokoro* is the best structured and accomplished work. Ojō-san is a typical daughter of the upper-middle class family in the Meiji period and her life depends entirely on her widow mother’s plan for her. Sensei finally gets married with her but, because of his dishonest

³ Sasaki Hideaki, 「新しい女」の到来—平塚らいてうと漱石 (Arrival of a new woman—Hiratsuka Raichō and Sōseki), Nagoya: Nagoya University Press, 1994,.

behavior towards his friend, he will carry regretful days for the rest of his life. Sensei declares that his wife should not know the reason of his suffering because he wants her to keep being the purest thing in this world. In his farewell letter Sensei writes to Watashi:

“...I was glad that she had not witnessed the terrible scene immediately after his death. I was afraid that a beautiful person such as she could not behold anything ugly and frightful without somehow losing her beauty. Even when the fear within me became so strong that it seemed to touch the very roots of my hair, I refused to move, not daring to expose her beauty to ugliness. I thought that to help destroy such beauty would be no less cruel and meaningless than to beat down a pretty, innocent flower.⁴”

And his last wish before the end is:

“I want both the good and bad things in my past to serve as an example to others. But my wife is the one exception- I do not want her to know about any of this. My first wish is that her memory of me should be kept as unsullied as possible. So long as my wife is alive, I want you to keep everything I have told you a secret-even after I myself am dead.⁵”

We see that the idealized image of a woman is omnipresent in both novels and it is the reason for the hero not to be able to interact face to face with her. When a woman is such a precious existence for the hero, he cannot interact with her as a companion of his life. It is not exactly how other authors of romanticism dealt with female characters in their novels. Yet, as Japanese Romanticism declared that love should be the heart of a novel, we can see a certain influence of this trend in Sōseki's way of describing women.

道草 Grass on the Wayside is one of the last long novels Sōseki offered to his readers. It is almost an autobiographic account of his life and the dark tone of the narration is provided by the extreme conditions of mind of the couple, Kenzō and his wife. The romantic female figure becomes a realistic wife who was looked down on as there must have been in many homes of the Meiji era. Kenzō is disgusted with anything around him and his irritation is escalated when he faces the resistance of his wife to accept things without questioning. She cares him dearly when he is sick. She sells her last formal kimono in order to get some money to contribute to their poor economy. But, when she is challenged by her husband to obey blindly, she demands him to admit her opinion too. For Kenzō the attitude of his wife was as if she was saying: being husband does not allow a person to be respected automatically, he must show why he deserves it.

Although their relationship is of the worst kind, they cannot live without each other. The wife is finally a counter mirror of Kenzō that embraces all his shortcomings: nervous, eccentric and egocentric personality. Sōseki, reaching his final works, could describe the reality as he knew how to do so. He positioned himself out of the naturalist movement when he started to write, but his endeavor to find the real meaning of novels pushed him towards the narration that could be mastered by studying the naturalist essence.

⁴ *Kokoro*, trans. By Edwin McClellan, Charles E. Tuttle Co., 1975, Tokyo, p. 234.

⁵ *Ibid*, p.248.

虞美人草 *The Poppy* and 明暗 *Light and Darkness*

Many of the literary critics point out that Sōseki examined into deep the human ego as the key feature of the stories. His first attempt of this kind focused on a woman appears already in 虞美人草, *The Poppy*, before all other novels he wrote for Asahi Shinbun as a professional writer. Although it is considered a sort of irrelevant work of his in comparison with others, I can trace a similar intention of the author in both, this one and his last unfinished novel, 明暗, *Light and Darkness*.

Sōseki tried hard describing a woman he wanted to present to us, Fujio, a beautiful, brilliant and stronger woman than anybody else in this World. The main character of *The Poppy* is the opposite image of what the people of that time usually conceived as the ideal lady in society. Her malignant stubbornness and arrogant egoism is decorated by her expensive silk kimono and stylish hairdo. The author follows her slightest movement of hands and eyes to describe an attractive yet malicious nature in the woman. When this sand castle is torn down and her pride is hurt, she cannot exist any longer in this world. The story ends abruptly while she cannot accept her failure.

In 明暗 *Light and Darkness*, his unfinished long novel to be, Sōseki returns to this concern of the female ego. Onobu is a well brought up young wife who had chosen her husband Tsuda by her own decision much to the admiration of other young women. The people envy Onobu and Tsuda as an exceptional beloved couple. However, they have to go through a strained relationship because of the clashes of the egos they experience daily. Onobu tries hard to defend her position against all personal and social barriers she encounters. Her inner voice is present at all moments and their dialogue builds up a love battle between Tsuda and Onobu.

Probably, this is the novel Soseki wanted to write from an early period as a professional writer. His consciousness about the female role in society developed through the time towards the recognition of their values as a person. In one of the last speeches he addressed to the students of Gakushuin University titled 私の個人主義 *My Individualism*, he speaks of the concept of freedom accompanied by the sense of obligation. He assures that when one claims his individualism among others this should entail the acceptance of other people's opinion too. One should respect the fellow person so that he can be respected in return. From our point of view, actually, he is speaking of the most important principle of democracy.

He also refers to the exaggerated manifestation of the feminist movement, which was going on at that time in England and reflected the capacity of the British society. He admits that it is an irregular case for the normal attitude of the people in the country, but his understanding is that the British people love freedom, the freedom to express one's idea, while at the same time being aware of one's obligations. No matter if you are a man or woman, when speaking your ideas, if you lack your own personality and consideration to others, immediately harmony is lost. To me, Sōseki struggled through his works to show the readers the real face of individuals, humans, in particular, women whose life and existence weigh so much as or even more than men.

Bibliography

Natsume Sōseki

I am a cat, Charles E. Tuttle Co. Rutland/Vermont & Tokyo/Japan, 1980

Botchan, CreatSpace Independent Publishing Platform, 2012

Sanshirō, Perigee Books, New York, 1977

And Then, Perigee Books, New York, 1982

The Gate, Perigee Books, New York, 1982

Kokoro, Charles E. Tuttle Co. Tokyo, 1975

The Wayfarer, Perigee Books, New York, 1982

Grass on the Wayside, Tuttle Publishing, Boston/Rutland, Vermont/Tokyo, 2000

Light and Darkness, Perigee Books, New York, 1982

『私の個人主義』、講談社学術文庫 講談社 2000 年

江藤淳『漱石とその時代』第一部～第五部、新潮社 1970 年～2000 年

『決定版 夏目漱石』新潮社、2011 年

夏目鏡子述 松岡譲筆録『漱石の思い出』文春文庫、2011 年

脇田晴子、林玲子、永原和子編『日本女性史』吉川弘文館、2002 年

佐々木英昭、『「新しい女」の到来—平塚らいてうと漱石』(Arrival of a new woman-Hiratsuka Raichō and Sōseki), Nagoya: Nagoya University Press, 1994.

貝原益軒『女大学』国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/754896/> 2013/10/16 参照

(たかぎ かよこ Universidad Autónoma de Madrid 助教授)

Kinship Terminology from a Cultural Perspective: Japanese versus? Hungarian

Judit Hidasi

This article is part of a longer study in progress on the relationship of language use and society with regards to kinship terminology. The article first gives some frame to the study by briefly introducing the concept of kinship, next different descent patterns in societies to be followed by categorization patterns of kinship terminology (Morgan) in Hungarian and Japanese. It is assumed that kin terms are valuable clues to the nature of a kinship system in a society as well as to the social statuses and roles of kinsmen, of the roles of men and women. Changes in kinship terminology also reflect to a certain extent changes of a given society.

What is kinship?

Kinship refers to the culturally defined relationships between individuals who are commonly thought of as having family ties. All societies use kinship as a basis for forming social groups and for classifying people. However, there is a great amount of variability in kinship rules and patterns around the world. In order to understand social interaction, attitudes, and motivations in most societies, it is essential to know how their kinship systems function.

In many societies, kinship is the most important social organizing principle along with gender and age. Kinship also provides a means for transmitting status and property from generation to generation. It is not a mere coincidence that inheritance rights usually are based on the closeness of kinship links. Kinship connections are based on two categories of bonds: those created by marriage (**affinal** relatives: husband, wife, mother-in-law, father-in-law, brother-in-law, sister-in-law) and those that result from descent (**consanguinal** that is 'blood' relatives: mother, father, grandparents, children, grandchildren, uncles, aunts and cousins), which is a socially recognized link between ancestors and descendants.

A third category of bond, referred to as **fictive kinship**, is used to create links to people who otherwise would not be kinsmen. Godparenthood is an example of fictive relationships in European cultures. This kind of bondness has been particularly important for instance in Hungarian culture – where in village-communities this kind of relatedness meant a base for community cooperation, solidarity and mutual help.

People often use different kin terms when addressing someone directly in contrast to when they are referring to them in a conversation with someone else. In Japanese culture for instance this distinction is clearly recognized by making a sharp difference between **terms of address** and **terms of reference** (*okaasan* versus *haha*, or *otousan* versus *chichi*).

Descent patterns categorizations

Kinship is perceived in a number of different ways around the world, resulting in a variety of types of descent patterns and kin groups. In kinship categorizations, one individual is usually labeled as Ego by anthropologists. This is the person to whom all kinship relationships are referred. The **unilineal descent principle** traces descent only through a single line of ancestors, male or female. Both males and females are members of a unilineal family, but descent links are only recognized through relatives of one gender. Hence the two basic forms of unilineal descent are referred to as **patrilineal** and **matrilineal**. With **patrilineal descent**, both males and females belong to their father's kin group but not their mother's. However, only males pass on their family identity to their children. A woman's children are members of her husband's patrilineal line.

The form of unilineal descent that follows a female line is known as **matrilineal**. In this pattern, individuals are relatives if they can trace descent through females to the same female ancestor. While both male and female children are members of their mother's matrilineal descent group, only daughters can pass on the family line to their offspring. However nowadays – due to changes in life-patterns, in economy and to the effect of modernization and globalization – even these societies tend to follow a different pattern, that of **cognatic descent**.

Most developed societies around the world today trace descent through both the mother's and the father's ancestors to some degree. The result is a more varied and complex family system. It occurs in four variations: **bilineal**, **ambilineal**, **parallel**, and **bilateral** descent. Out of the four, in this paper we briefly discuss only the ambilineal and the bilateral descent pattern, which have a direct relevance to the discussed cultures: Japanese and Hungarian.

Ambilineal descent is a particular descent system that, in a sense, combines unilineal patterns. Descent from either males or females is recognized, but individuals may select only one line to trace descent. Since each generation can choose which parent to trace descent through, a family line may be patrilineal in one generation and matrilineal in the next. The reason for choosing one side over the other often has to do with the relative importance of each family. In other words, ambilineal descent is flexible in that it allows people to adjust to changing family situations. For instance, when a man marries a woman from a politically or economically more important family, he may agree to let his children identify with their mother's family line to enhance their prospects and standing within the society.

By far the most common pattern is **bilateral descent**, which is commonly used in European cultures. This cognatic system traces descent from all biological ancestors regardless of their gender and side of the family. In addition, all male and female children are members of both their father's and mother's families.

However, particular families may disregard the descent pattern dominant in their culture and treat it as a matter of individual choice – legal regulations permitting.

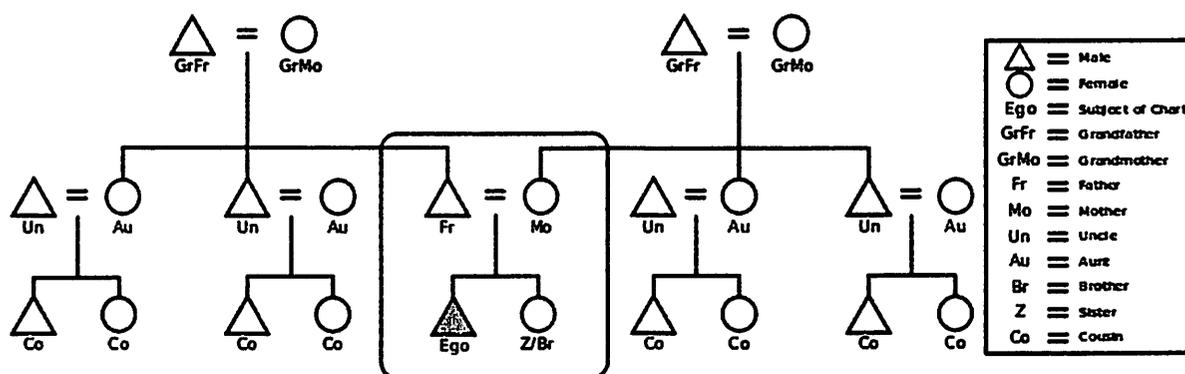
While there is no inherent gender bias in the bilateral descent principle, there often is a slight male bias in marriage practices and in the creation of families. This can be seen in many societies today when a man's family name is used by his wife and children. With this exception, however, there usually is no other similarity with patrilineal descent.

Kinship terms and kinship terminology

Kinship terminology refers to the various systems used in languages to refer to the persons to whom an individual is related through kinship. Different societies classify kinship relations differently and therefore use different systems of kinship. (Lévi-Strauss 1949) Kinship terminologies include the terms of address used in different languages or communities for different relatives and the terms of reference used to identify the relationship of these relatives to Ego or to each other.

Kin terms are valuable clues to the nature of a kinship system in a society as well as to the social statuses and roles of kinsmen. Based on the typology of six basic patterns of classification elaborated by Lewis Henry Morgan (1818–1881) in his 1871 work *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family* there are six distinct kin naming systems used around the world. They are referred to as the Eskimo, Hawaiian, Sudanese, Omaha, Crow, and Iroquois systems. They are nevertheless not limited to the cultures for which they were named. These systems are seldom followed exactly – they usually have unique cultural variations. The Eskimo system is one of the simplest, despite the fact that it is found in the majority of the most technologically complex societies. The common denominator for the Eskimo kin naming system is an economy that forces the nuclear family to be mostly independent. The Eskimo kin naming system is found mainly in societies that use the bilateral principle of descent and that strongly emphasize the nuclear family over more distant kinsmen. Both Ego's mother's and father's collateral relatives are considered equally important. That is to say, no distinction is made between relatives on the mother's and father's side of the family. This is reflected in the kin names. Despite the fact that some relatives are lumped together with the same linguistic terms in the Eskimo and other kin naming systems, people do make distinctions between them as unique individuals.

The Eskimo-type kinship terminology system



We assume that both Japanese and Hungarian are typologically nearest to the „eskimo kinship” system. which has both classificatory and descriptive terms; in addition to sex and generation, it also distinguishes between lineal relatives (those related directly by a line of descent) and collateral relatives (those related by blood, but not directly in the line of descent). Lineal relatives have highly descriptive terms; collateral relatives have highly classificatory terms. Another dimension added to kinship relations is relative age. Rather than one term for "brother", there exist, for example, different words for "older brother" and "younger brother". (Haga 1998)

In traditional Hungarian society an individual was identified principally by his or her place in a kinship organization. Traditionally, more emphasis was placed on the paternal kin than on the maternal because of the "male-centric" worldview in Hungarian rural society and the economically more beneficial inheritance system to males along the patriline. An urban and a rural system coexist in Hungary. The urban system reflects nuclear family organization, and the rural system and its many regional variants depict the traditional extended family organization. Generally, Hungarian kinship terminology is descriptive and sharply distinguishes between affinal kin, consanguineous kin, and fictive kin. The fictive kinship of godparenthood (*keresztkomaság*) is a highly significant, lifelong alliance.

Bilateral kinship-terms Hungarian – English – Japanese

HUN <i>szépapa</i>	+5	HUN <i>szépanya</i>
ENG <i>great-great-grandfather</i>		ENG <i>great-great grandmother</i>
JAP 高祖父 <i>kousofu</i>		JAP 高祖母 <i>kousobo</i>
HUN <i>ükapa</i>	+4	HUN <i>ükanya</i>
ENG <i>great-grandfather</i>		ENG <i>great-grandmother</i>
JAP 曾祖父 <i>sousofu</i>		JAP 曾祖母 <i>sousobo</i>
HUN <i>nagyapa</i>	+3	HUN <i>nagyanya</i>
ENG <i>grandfather</i>		ENG <i>grandmother</i>
JAP 祖父 <i>sofu</i>		JAP 祖母 <i>soba</i>
HUN <i>apa</i>	+2	HUN <i>anya</i>
ENG <i>father</i>		ENG <i>mother</i>
JAP お父さん / 父 <i>otousan/chichi</i>		JAP お母さん / 母 <i>okaasan/haha</i>

	EGO	
HUN (a) <i>fia</i>	-1	magyar (a) <i>lány</i>
ENG <i>son</i>		angol <i>daughter</i>
JAP 息子 <i>musuko</i> 長子 <i>choushi</i> 長男 <i>chounan</i> 次男 <i>jinan</i>		japán 娘 <i>musume</i> 長女 <i>choujo</i> 次女 <i>jijo</i>
HUN <i>fiú unoka</i>		HUN <i>lány unoka</i>
ENG <i>grand-son</i>	-2	ENG <i>grand-daughter</i>
JAP 孫 <i>mago</i> 孫息子 <i>magomusuko</i>		JAP 孫娘 <i>magomusume</i>
HUN <i>dédunoka (fiú)</i>	-3	HUN <i>dédunoka (lány)</i>

ENG <i>great-grandson</i>		ENG <i>great-granddaughter</i>
JAP 曾孫 <i>himago</i>		JAP 曾孫 <i>himago</i>
HUN <i>ükunoka (fiú)</i>	-4	HUN <i>ükunoka (lány)</i>
ENG <i>great-great-grandson</i>		ENG <i>great-great-granddaughter</i>
JAP 玄孫 <i>yashago/genson</i>		JAP 玄孫 <i>yashago/genson</i>

Kinship systems are changing rapidly today as societies are increasingly exposed to other cultures around the world and new systems of economies, not speaking about societal changes (Lévi-Strauss 1949). Japanese kinship terms have two categories: reference terms and address terms. (Suzuki 1978) The latter is used to call your family without using their name. Kinship reference terms are never used to call them directly. In this respect it is interesting to witness in modern Japanese language use the process of substituting Japanese terms by borrowed English words, and also the „perspective shift” in address terms which can be detected in the way family members called each other in the remote past, in the near past and call each other in present times. It is namely significant to note that the traditional terms of address for family members (*otousan, okaasan, oneesan*) are increasingly being substituted by borrowed English terms (*papa, mama, shisutaa*) on the one hand, and on the other addressing in the nuclear family has also undergone great changes. In modern Japanese language use in-family addressing is recently formulated from the perspective of the child – he/she who is in the focus of the family. This is different from the traditional perspective. These aspects – among others – are the ones that require further research.

Research will be expanded to aspects of change in Hungarian society and changes in language use. Finally the collected data with respect to the two cultures and languages could be compared for further conclusions.

References

- Haga Yasushi: 1998 *Nihongo no shakai shinri*. Tokyo: Ningen no Kagakusha.
Lévi-Strauss, Claude: 1949 *The Elementary Structures of Kinship*. New York: Beacon Press.
Morgan, Lewis Henry: 1871 *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family*. Smithsonian.
Nakane Chie: 1967 *Tateshakai no ningenkankei*. Tokyo: Kodansha.
Suzuki Takao: 1978 *Kotoba to bunka (Translated as Words in context by Akira Miura)*, Tokyo: Kodansha International.

(ユディット ヒダシ・ブダベスト商科大学教授)

【日本語ジェンダー学会 15 回大会のお知らせ】

日本語ジェンダー学会 第十五回 年次大会

日本語ジェンダー学会
第 15 回 年次大会
2014 年 6 月 21 日 (土)
北九州市立大学 北方キャンパス

テーマ「音楽とジェンダー」

基調講演

「音楽にジェンダーはあるのか？」

中村美亜 (九州大学 准教授)

(音楽・音響社会学、ジェンダー研究)

シンポジウム

「音楽の中にみるジェンダー意識の変容」

「バルトークとコダーイの音楽におけるジェンダー」

「リフレインされる歌詞—ジェンダーの視点から」

「J-POP 歌詞にみる若者のジェンダー意識と自己世界」

ユディット・ヒダシ

佐々木瑞枝

吉崎泰博

日本語ジェンダー学会会則

第1条（名称）本会は、日本語ジェンダー学会（The Society for Gender Studies in Japanese）と称する。

第2条（目的）本会は、日本語におけるジェンダー表現を総合的に研究することを目的とする。

第3条（事業）本会は、上記の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1)年度ごとの大会（研究集会）、その他の研究会の開催
- (2)機関誌『日本語とジェンダー』の刊行
- (3)研究成果の公刊・公開
- (4)その他、本会の目的を達成するのに必要な事業

第4条（会員・賛助会員）本会の会員は、上記の目的に賛同し、その研究を行なっている者とする。また、本会の研究目的に賛同し、支援する個人もしくは法人を賛助会員とする。

第5条（会費）会員は、総会ないし研究集会参加時に会費を納入するものとし、振込み等は行わない。

第6条（役員）本会は、会長1名と顧問若干名・理事若干名・評議員若干名・監査2名・幹事若干名をおく。

- (1)会長は、理事の互選により選出され、会務を統括し、本会を代表する。
- (2)顧問は、会長ないし理事の推薦をうけて理事会によって指名し、総会において決定する。
- (3)理事は、理事会が会員の中から推薦する者と、会員の選挙によって選出される者を含む。
- (4)評議員は、理事会が会員の中から推薦する者と、会員の選挙によって選出される者を含む。評議員は、理事の任務遂行の全般を補佐する。
- (5)監査および幹事は、理事会の承認を経て、会長が委嘱する。監査は、年一回会計を監査し、幹事は大会・研究集会の運営等において理事を補佐する。

第7条（総会・理事会）本会に総会、理事会、評議員会をおく。

- (1)総会は、会員をもって組織し、本会の最高の議決機関として本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。総会は年一回、当該年度の大会のときに、また臨時総会は会長が必要と認める場合、随時開催する。
- (2)理事会は、会長および顧問、理事をもって組織し、第3条に定める事業および本会の予算・決算に責任をもち、会務執行の任に当たる。理事会の開催は、会長が招集する。
- (3)評議員会は、年次総会の前に開催する。

第8条（事務局）本会は、事務局を群馬大学留学生センター石田研究室におく。

第9条（会則の改正）本会則は、総会出席者の三分の二以上の同意を得て、改正することができる。

付則 この会則は2001年3月18日の日本語ジェンダー学会の設立総会において制定し、その日より発効する。

日本語ジェンダー学会役員名簿

(※印は、2014年に昇任ないし新規就任)

【本部：日本】

名誉会長	佐々木瑞枝 (武蔵野大学名誉教授)
顧問	國廣哲彌 (東京大学名誉教授) 山田卓生 (横浜国立大学名誉教授)*
会長	HIDASAI Judit (ヒダシ・ユディット; ブダペスト商科大学教授)
副会長	日置弘一郎 (京都大学教授) 斎藤理香 (ウェスタン ミシガン大学准教授) 渡部孝子 (群馬大学准教授)
理事 (50音順)	穂田照子 (桜美林大学准教授) 蝦名毅 (JX 日鉱日石金属株式会社) 河野憲嗣 (京都大学博士; 経済学)* 因京子 (日本赤十字九州国際看護大学教授) 前田直子 (学習院大学教授) 水本光美 (北九州市立大学教授) 矢野安剛 (早稲田大学名誉教授)*
評議員 (50音順)	宇佐美まゆみ (東京外国語大学大学院教授) 王鉄橋 (洛陽外国語学院日本学研究センター教授) 大島弥生 (東京海洋大学教授) 岡本能里子 (東京国際大学教授) 小川早百合 (聖心女子大学教授) 笠原仁子 (編集者) 門倉正美 (横浜国立大学名誉教授) 佐藤勢紀子 (東北大学高等教育開発推進センター教授) 示村陽一 (武蔵野大学教授) 曹大峰 (北京外国語大学教授) 高木香世子 (マドリッドアウトノマ大学助教授) 立松喜久子 (前米加大学連合副所長) トムソン木下千尋 (ニューサウスウェールズ大学教授) 中村桃子 (関東学院大学教授) 原田邦博 (NHK 考査室主管) 朴 正一 (釜山外国語大学教授) 松井幸子 (三重大学名誉教授) 松沢明広 (朝日新聞東京本社・校閲センター) 三木千恵 山崎佳子 (前東京大学特任専門員) レイノルズ・秋葉かつえ (ハワイ大学教授)
事務局	
事務局長	穂田照子 (桜美林大学准教授)
メール担当	三木千恵

財務	河野憲嗣（京都大学博士；経済学）
広報	蝦名毅
<u>学会誌編集</u>	
<u>委員長</u>	斎藤理香（ウェスタン ミシガン大学）
<u>副委員長</u>	因京子（日本赤十字九州国際看護大学） 渡部孝子（群馬大学）
<u>編集委員</u>	門倉正美（元横浜国立大学） 小川早百合（聖心女子大学） 日置弘一郎（京都大学）
監査	松谷葉子（相愛大学音楽学部音楽マネジメント学科准教授）

【支部：海外】

- 中国支部長：曹 大峰（北京外国語大学教授）
- 韓国支部長：朴 正一（釜山外国語大学教授）
- 東ヨーロッパ支部長：HIDASÍ Judit（ブダペスト商科大学教授）
- 西ヨーロッパ支部長：高木香世子（マドリッドアウトノマ大学助教授）
- オーストラリア支部長： トムソン木下千尋（ニューサウスウェールズ大学教授）

日本語ジェンダー学会入会申込書

日本語ジェンダー学会」に入会を申し込みます。

日付_____年_____月_____日

氏名 (ふりがな) _____ (_____)

性別 F M 生年月日 (もし良ければ) _____

住所 _____

電話 _____

e メールアドレス _____

所属 _____

(日本学術会議会員規定に従い、以下の所属に○をおつけ下さい)

A 会員 大学教授 助教授 講師 非常勤講師 大学院生 研究所員

B 会員 日本語学校教師 会社員 学校教諭 その他

なお、AB 両方に所属される先生は A の方にお書きください。

この領域での主な業績 _____

日本語教育経験 (年数・教育形態・対象学習者の種類等について自由にお書き下さい)

本会への要望・期待(自由にお書き下さい)

- * 本申込書は、メールで三木千恵 (admission@gender.jp)宛にお送りください。メールアドレスをお持ちでない方は郵便で以下にお送り下さい。
〒194-0294 東京都町田市常磐町 3758 番地 桜美林大学
リベラルアーツ学群(コミュニケーション学) 穂田(あきた) 照子研究室内
日本語ジェンダー学会

Regulations of the Society for Gender Studies in Japanese

Article 1. Name

This society shall be known as The Society for Gender Studies in Japanese.

Article 2. Objective

This Society shall research all aspects of gender-related expression in the Japanese language.

Article 3. Activities

In order to fulfil its stated objective, the Society shall:

- Convene an annual conference and other study groups.
- Publish the bulletin “Japanese and Gender”.
- Release the results of its research.
- Conduct other activities that contribute to its purpose.

Article 4. Members and Auxiliary Members

Membership of this Society shall consist of those who support its objectives and who are engaged in related research. Individuals or corporations who support the Society’s research objectives may be admitted as auxiliary members.

Article 5. Membership Fees

Membership fees shall be payable at the annual conference or at study groups. Payment by bank transfer shall not be accepted.

Article 6. Board

The Society’s Board shall consist of one President and a number of advisors, directors, trustees, auditors and secretaries.

- 1) The President shall be elected by mutual vote of the directors, and shall preside over the business of the Society and act as its representative.
 - 2) The advisors shall be nominated by the Board of Directors after recommendation by the President and directors, and shall be confirmed by the general assembly.
 - 3) The directors shall include both those recommended from the membership of the board of directors and those elected by the general members.
 - 4) The trustees shall include both those recommended from the membership of the board of directors and those elected by the general members. The trustees shall assist in all aspects of the President’s duties.
- The President, with the approval of the directors, shall appoint the auditors and secretaries. The auditors shall conduct an annual financial audit of the Society. The secretaries shall assist the directors with the organization and running of the annual conference and study groups.

Article 7. General Assembly and Board of Directors

The Society shall consist of a General Assembly, a Board of Directors and a Board of Trustees.

- 1) The General Assembly shall be comprised of the Society's members, and will be the highest decision making body regarding matters of the Society's activities and management. The General Assembly shall be convened once a year during the annual conference, and at any other time the President deems it necessary.
- 2) The Board of Directors shall be comprised of the President, advisors and directors, and shall be responsible for the activities outlined in Article 3, as well as the Society's budgeting and financial administration. The President shall convene the Board of Directors.
- 3) The Board of Trustees shall be convened before the annual conference.

Article 8. Office

The Society shall establish an office in the Ishida Research Office at the International Student Center of Gunma University.

Article 9. Amendment of Regulations

These regulations may be amended with the consent of a two thirds majority of those attending the annual conference.

By-Law. These regulations shall be published at the inaugural meeting of The Society for Gender Studies in Japanese on March 18, 2001, and shall be effective from that date.

Officers of The Society for Gender Studies in Japanese

Honorary President

SASAKI Mizue (Professor, Musasino University)

President

HIDASAI Judit (Dean, Budapest Business School)

vice-President

HIOKI Koichiro (Professor, Kyoto University)

SAITO Rika (Associate Professor, Western Michigan University)

WATANABE Takako (Associate Professor, Gunma University)

Advisors

KUNIHURO Tetsuya (Professor Emeritus, Tokyo University)

YAMADA Takuo (Professor Emeritus, Yokohama National University)

Directors

AKITA Teruko (Associate Professor, Ohbirin University)

CHINAMI Kyoko (Professor, The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing)

EBINA Tsuyoshi (JX Nippon Mining & Metals Corporation)

KADOKURA Masami (Professor, Yokohama National University)

KAWANO Kenji (Financial Administration)

MAEDA Naoko (Professor, Gakushuin University)

MIZUMOTO Terumi (Professor, Kitakyushu University)

YANO Yasukata (Professor Emeritus, Waseda University)

Trustees

CAO Dafeng (Professor, Beijing Foreign Studies University)

GILSON Julie (Lecturer, Birmingham University, UK)

HARADA Kunihiro (NHK Senior officer program inspection)

KASAHARA Kimiko (Editor, Poplar Communications. Co.Ltd.)

MATSUI Sachiko (Professor Emeritus, Mie University)

MATSUZAWA Akihiro (Asahi Newspaper Co.)

NAKAMURA Momoko (Professor, Kanto Gakuin University)

OGAWA Sayuri (Professor, University of The Sacred Heart Tokyo)

OKAMOTO Noriko (Professor, Tokyo International University)

OSHIMA Yayoi (Professor, Tokyo University of Marine Science and Technology)

PARK Jungil (Professor, Pusan University of Foreign Studies)

REYNOLDS Katsue A. (Professor, University of Hawaii at Manoa)

SATO Sekiko (Professor, Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University)

SHIMEMURA Yoichi (Professor, Musasino University)

TAKAGI Kayoko (Professor, Universidad Autonoma de Madrid)

TOMPSON Kinoshita Chihiro (Professor, University of New South Wales)
TATEMATSU Kikuko (Former Assistant Director, Inter-University Center)
USAMI Mayumi (Professor, Tokyo University of Foreign Studies)
YAMAZAKI Keiko (Lecturer, Tokyo University)
WANG Tie Qiao ((Professor, PLA University of Foreign Languages)

Secretaries

AKITA Teruko (Chief Secretary)
MIKI Chie (Mail and Office Administration)
KAWANO Kenji (Financial Administration)

Public relations

EBINA Tsuyoshi (JX Nippon Mining & Metals Corporation)

Inspector

MATSUTANI Yoko

Editors of the Bulletins

Chief Editor SAITO Rika
Editors CHINAMI Kyoko, WATABE Takako
Examiners HIOKI Koichiro, KADOKURA Masami, OGAWA Sayuri,
 YAMAZAKI Yoshiko
Advisor SASAKI Mizue

(As of July of 2013)

Application for Membership
The Society for Gender Studies in Japanese

I wish to apply for membership of The Society for Gender Studies in Japanese.

Date _____,

Name _____

Gender M/F DOB (optional) _____

Address _____

Phone _____

Email _____

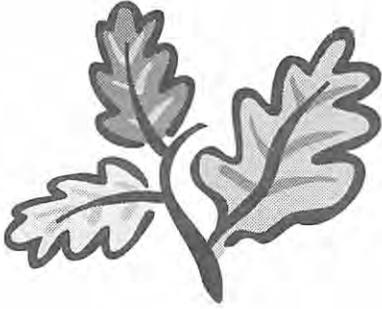
Affiliation _____

Major achievements in this field

Japanese language education experience
(Include number of years, type of institution, type of students, etc.)

What do you expect to gain from joining this Society?

Please forward this application form by email to Miki Chie chierin@mb2.seikyuu.ne.jp
Applicants without email access, please post it to the following address:



執筆要領

2005年8月制定
2006年6月改定
2009年3月改定
2013年11月改定
日本語ジェンダー学会
学会誌編集委員会

1. 言語

- ・ 投稿原稿は日本語または英語で執筆する。

2. 内容区分

- ・ ①研究論文、②研究ノート、③書評、④短信のいずれかとし、それを明記のうえ投稿すること。未発表のものに限る。
 - ① 研究論文：当該分野において、先行研究に加えるべきオリジナリティのある研究成果が論理的に述べられているもの。
 - ② 研究ノート：萌芽的研究を含めて、今後の研究の基礎となる要素、あるいは今後、優れた研究論文に発展していく要素をもつもの。
 - ③ 書評：当該分野の研究にとって価値ある文献に関する書評。
 - ④ 短信：当該分野の研究にとって価値ある情報に関する報告。

3. 用紙・ページ設定・フォント・サイズ・分量

- ・ 文書はA4サイズとする。1ページは、40字×40行とする。余白は上、下、左、右とも25mmとする。
- ・ フォントとそのサイズは、和文が明朝体の10.5級、英文がTimes New Romanの11級とする。
- ・ 原稿の分量は、研究論文の場合は、上記設定において、和文・英文原稿ともに7ページから8ページ（和文の場合、12,000字程度）を目安とする。また、研究論文以外については、6,000字から8,000字程度を目安とする。ただし編集委員会の容認や指示がある場合は、この分量制約に拘束されない。

4. 査読基準

- ・ 上記内容区分のうち、①研究論文、②研究ノートについては、下記の観点から査読を行う。
 1. 当誌『日本語とジェンダー』への適合性
 2. 独創性（当該研究領域への貢献）
 3. 先行研究の把握、論理性・実証性
 4. 論文の構成

5. 表現の明解さ・読みやすさ

- ・なお1に関しては、当誌の趣旨は、日本語の言語表現・言語現象の分析を通して社会的概念であるジェンダーを論じるところにある。また、投稿論文に関して、内容区分を変更した上での修正を編集委員から依頼する場合もある。

5. 投稿締切

- ・編集委員会で決定する。

6. 投稿先

- ・投稿原稿は、電子ファイルを学会誌編集委員長に電子メール等によって送付する。

7. 投稿料

- ・投稿には、一律 2,000 円の投稿料を収める。以下の収納先に振り込むこととする。備考欄に「投稿」と記載のこと。

- 銀行名 ゆうちょ銀行
- 金融機関コード 9900
- 店番 019
- 店名 019 店
- 預金種目 当座
- 口座番号 0744082
- ニホンゴジェンダーガッカイ

郵貯銀行から振り込む場合は、以下のとおり

- 口座番号 00140-6-744082
- 口座名義 日本語ジェンダー学会

8. 採否について

- ・投稿された原稿の採否は、当誌編集委員会が決定する。

9. 投稿原稿作成上の注意

9.1 文書作成ソフト

- ・文書作成ソフトは、Word 文書か、または Word 文書と互換性のあるソフトを使用すること（例えば、Word2000 以上、OpenOffice1.12 以上など）。後者の場合は、Word 文書ファイルに変換して提出すること。また作成した文書の PDF フォーマットのファイルも一緒に提出すること。

9.2 箇条書き

- ・文頭の番号、点、文字などは、オートコレクト機能を使用せずに直接入力すること。

9.3 図表

- ・図表は文書の中に入れること。
- ・図はイメージデータが望ましい。また、表は Word の罫線を使って作成することが望ましい。
- ・図表が本文中にうまく納まらない場合は、別のファイルとして編集委員長に送付することも可

とするが、その場合は、それらの図表の仕上がりについては編集委員会に一任すること。

9.4 注と参考文献

・注と参考文献・引用文献は、なるべく後ろにまとめる。注は本文中に上付添字として示す。

9.5 査読用のファイル

・査読用に、完成論文から、最初の「氏名」と最後の「氏名ふりがな・所属・連絡先」を除いたものを「査読用ファイル」として、完成論文のファイルといっしょに提出すること。

9.6 連絡先のファイル

・原稿タイトル、著者氏名（よみがな）、所属、連絡先（住所・電話・メールアドレス）を記したファイルを、完成論文といっしょに提出すること。

9.7 論文サンプルのファイル

・タイトル、名前、要旨、章節立て、注、参考文献の書き方等については、「原稿サンプル・ファイル」に倣うこと（原稿サンプル・ファイルに上書きして原稿を書くことをおすすめする）。

10. 投稿の際の提出物（以下の3点）

- ・完成論文ファイル（Word および PDF ファイル。論文タイトルをファイル名とすること）
- ・査読用論文ファイル（Word ファイルのみ。「査読用・論文タイトル」をファイル名とすること）
- ・連絡先ファイル（Word ファイルのみ）

*投稿への査読手続きの詳細についての御質問にはお答えしかねます。

*二重投稿や剽窃などの不適切な原稿に関しては厳しく対処いたしますので、研究者としての良識をもってご執筆下さい。

編集後記

第14回年次大会のテーマ「翻訳とジェンダー」は、水田宗子(1991)がTrans/gender/lationと示したような、「ジェンダー」が「翻訳」の中にすっぽりと包み込まれる、あるいは「ジェンダー」が二つの異なる言語の間の「翻訳」という架け橋と重なり合う形でイメージできる。また、一方の言語でジェンダーについて「有標」とされる言葉が、もう一方の言語に移し変えられると「無標」となるような翻訳行為に伴う変化は、ジェンダーが文化や社会によって多様に位置づけられることにも呼応している。このような広がりを見せるジェンダーと翻訳をめぐる問題は、今後もっと取り上げていきたい領域の一つだと考える。さらに本大会では、「翻訳とジェンダー」を含むさまざまなトピックの研究発表が5件もあり、発表後の質疑応答でも大変活気のあるやりとりが見られた。討議の時間が少なすぎると思わせるほどに、しかし学会としては理想的な展開で、大会の幕を閉じることとなった。ハンガリーにおける研究例会は、日本語とハンガリー語、また日本文化とハンガリー文化の、ジェンダーを共通の視点として互いを照らし出すような発表の場となった。

今年度の学会誌は、投稿あるいは寄稿による論文・研究ノートに掲載がなく、編集委員長としてその責任を痛感している。今後はさらに執筆者の開拓に力を注ぐとともに、是非、会員の皆様からの画期的な論考のご投稿を願います。

(第14号 編集委員長 斎藤理香)

編集委員 (*は委員長)

小川早百合、門倉正美、*斎藤理香、因京子、日置弘一郎、渡部孝子

査読協力者

佐々木瑞枝

日本語とジェンダー 第十四号

2014年6月発行

編集者 日本語ジェンダー学会
学会誌編集委員会

発行者 日本語ジェンダー学会

〒194-0294 東京都町田市常磐町3758番地
桜美林大学 リベラルアーツ学群
穂田研究室

TEL 042-797-9421

E-mail jimukyoku@gender.jp

ISBN 4-9900828